ジェーンズ物語

連載１　熊本洋学校教師「ジエーンズ邸」とは

ジェーンズ邸前館長　黒田孔太郎

明治四年から明治九年まで、熊本洋学校の教師として、アメリカから招かれた、Ｌ（リロイ）・Ｌ（ランシング）・ジェーンズが家族とともに住んだ邸宅です。当時の熊本には、西洋建築物を、建てることができる大工はいなかったので、長崎から大工を招いて造ったといわれています。ンェーンズ邸建築には莫大なお金がかかりましたが、熊本はそうまでしてでも、ジェーンズがやってくるのを首を長くして待っていたのでした。熊本に現存する最古の洋式建築です。ジェーンズは、明治維新当時の日本が、外国文化を導入して、近代化を図るために招いた、お雇い外国人と呼ばれる人の一人です。

熊本洋学校は現在、県立第一高等学校がある場所、古城（ふるしろ）に開校しました。ジェーンズは徳富蘇峰（とくとみそほう　ジャーナリスト）、海老名弾正（えびなだんじょう　京都同志社八代総長）、横井時雄（よこいときお　衆議院議員）、横井時敬（よこいときよし　東京農業大学初代学長）等、明治、大正、昭和初期の日本の教育界、宗教界、実業界等をリードする有為な人材を数多く育てた後に、明治九年の十月に熊本を去りました。明くる年の明治十年、熊本を舞台として始まった、日本人同士の最後の戦争、西南戦争の時には、ジェーンズ邸は官軍総督として来熊した、有栖川宮熾仁親王（ありすがわのみやたるひとしんのう）の宿所となりました。この有栖川宮熾仁親王の許可により、官軍、薩摩軍の敵味方の関係なく負傷兵を助ける、救護団体、「博愛社」が設立されます。博愛社は、十年後に日本赤十字社となったので、このジェーンズ邸は「日赤記念館」とも、呼ばれています。

その後、明治二十七年に南千反畑町に移築します。まずは物産館として使われましたが、明治三十六年には県立高等女学校の仮校舎としても使用されました。また、日露戦争のロシア人将校の捕虜収容所にもなりました。戦争が終わるとまた、物産館となり、昭和七年には再び水道町に移築し、日赤事務所、血液センターとして使われました。さらに、昭和四十五年に、記念館として水前寺公園東隣の、現在地に移築されました。そして同年十一月に熊本市有形文化財指定、四十六年五月には熊本県指定有形文化財となり現在に至っています。

この敷地内に、夏目漱石が熊本時代に三番目に住んでいた住宅（旧大江村・現在の新屋敷町）も、昭和四十七年に移築されました。ここには多少図々しい、五高生「股野義郎　またのよしろう」君が住むところがないといって書生として住み込みます。朝寝坊のうえにご飯をたくさん食べたり、漱石の弁当をこっそり食べたりする人です。漱石は『吾輩は猫である』の中に多々良三平（たたらさんぺい）という野蛮な書生を登場させますが、このモデルは股野義郎だといわれています。

ジェーンズ物語

連載２　ジェーンズとは

ジェーンズ邸前館長　黒田孔太郎

リロイ・ランシング・ジェーンズの写真を、右に載せました。写真でお分かりのように、元軍人です。アメリカ合衆国の第十六代大統領、リンカーンの時代に起きた南北戦争に参加した人です。

1837 年、3 月 27 日にアメリカのオハイオ州に生まれ、敬虔なプロテスタントの両親に育てられました。子ども時代は、泳ぎと釣りが好きで、兎狩り等に熱中し、乳搾りをしたり、馬を馴らしたり、家畜の世話をしたりしながら大きくなりました。また機械類か好きで屋根裏で掛け時計を見つけては、分解するのが大好きでした。

1854 年、16 歳になった時、父親から動められて、法律事務所で法律の勉強を始めました。しかし彼の関心は、ワシントンやナポレオン等の活躍にあったのでした。

1856 年、義務的な法律の勉強に見切りをつけたジェーンズは、軍人になろうと思い、父親を少しずつ説き伏せていきました。

そしてついに、４月、厳しい試験があるアメリカで最もハイレベルの「ウェスト・ポイント陸軍士官学校」の士官候補生として仮入学したのです。ニューヨークから約２時間の郊外にありました。ジェーンズが嬉しかったのは、学ぶ内容が軍事工学だけでなく、物理、化学、天文学、地理学、地質学と様々な勉強ができたので、卒業後は民間でも仕事が出来るようになっていたことだったのです。ウェスト・ポイント陸軍士官学校出身者は道路、運河、鉄道といった分野でも活躍できたのでした。仮入学を許可されたジェーンズはその後更に試験を受け、７月に正式に入学を許されたのでした。

ジェーンズは 1861 年にこの陸軍士官学校を卒業します。この卒業の前に、リンカーンが大統領になり「奴隷解放」をめぐって、南北戦争が始まりました。ジェーンズは卒業すると、奴隷開放側、北軍の砲兵隊少尉として参戦し、最後は砲兵大尉にまで昇進します。途中で、砲兵戦術の教官助手、地理学、歴史学、論理学の助教授にも任命されます。南北戦争は北軍の勝利となり、1865 年に終結します。その後ジェーンズはオレゴン州のスティーブンス砦に配属されて、体調を崩してしまいました。また、戦争がないときの軍人はあまり意味がないと考え、1867 年 12 月に退役します。

1869 年、結婚していたジェーンズは新しい生活を始めようと、妻ハリエットと生れたばかりの子どもを連れて、メリーランド州セイント・デニスに引越し、エルク・リッジ農場を買い、農業を始めました。この農場は中程度の大きさで、土地の質もまずまずでした。子どものときから経験している家畜の飼育や、この農場での農業経験が、熊本へ来てからも大変役に立ちます。この頃までは、熊本に招聘されることなどは全く頭になかったでしょう。しかし日本は動乱の明治維新期に入っていたのでした。そういう時期に熊本は洋学校の先生を探していたのでした。

ジェーンズ物語

連載３　洋学校ができるまで

ジェーンズ邸前館長　黒田孔太郎

明治四（一八七一）年九月に、熊本洋学校が、古城（ふるしろ、現在県立第一高等学校のあるところ）に出来ました。そのいきさつを述べます。

横井小楠の名前をご存知でしょう。小楠は、あの勝海舟が「おれは、今までに天下で恐ろしいものを二人見た。それは横井小楠と西郷南洲(隆盛)だ」といったほどの人物で、佐久間象山と並ぶ開明的な二大思想家といわれています。

小楠は、日本が開国して外国の文化を取り入れることを主張しました。当時の細川藩は、強い保守主義と武士の勇敢さで有名でしたので、小楠はその保守主義の中では、十分力を発揮することは出来ませんでした。しかし岩倉具視を中心とする明治政府は、小楠を参与（今の大臣級）として登用します。小楠の開明的な思想が認められたのです。いよいよ小楠の思想が生かされると期待されましたが、明治二年の一月五日、京都御所の明治天皇に拝謁して、太政官に出仕し、帰る途中に、六名の攘夷派の刺客に襲われ、暗殺されてしまいました。「キリスト教を日本に伝えようとしている」と誤解されたのです。熊本市沼山津（ぬやまづ）にある小楠記念館には、そのとき身を守るのに使った、刃こぼれのある短刀が展示してあります。

生前、小楠は二人の甥、横井佐平太と大平を、長崎からアメリカへ密航させて送っていました。しかし、大平は肺結核治療のために帰国することになりました。

小楠の意思をついで、今の県知事にあたる知藩事、細川護久（もりひさ　あの細川首相の曽祖父）に、洋学校をつくりアメリカから優秀な教師を招聘しよう、と勧めます。護久は弟の長岡護美（もりよし）を大参事（知藩事の次の位）に任命し、熊本を進歩的な地域に変革しようとしていたので、これを受け入れました。

しかし、保守的な熊本に外国人を呼ぶことを心配する傾向があったので、大平は病の身を押してアメリカ人の教師を招聘することに尽力しました。

最適な教師を見つけることは、簡単ではありませんでした。大平は、かつて長崎で学んだ宣教師のフルベッキに人選を依頼します。当時フルベッキは、東京で、後の東京帝国大学の前身、「大学南校」で教鞭をとっていました。彼は「肥後政府は元軍人仕官で、英語と全科目を教えることが出来る、夫人同伴の既婚者を希望しています。肥後政府は急いでいます」とアメリカへ大平の意思を伝えました。通信が一月単位で太平洋を渡って行く時代ですので、時間がかかりました。ジェーンズがこの申し出を聞いたのは、一八七一年の春で、最初は断りましたが、妻の父親からも勧められて、二ケ月間熟慮の結果、熊本へ家族同伴で行くことを決心しました。開拓精神が旺盛なアメリカ人でも、何も知らない日本の一地方「肥後」へ家族同伴で行くことには、大変不安を感じる時代でした。

ジェーンズ物語

連載４　ジェーンズ一家日本へ

ジェーンズ邸前館長　黒田孔太郎

ジェーンスが熊本に第一歩をしるした百貫港

明治四年八月、ジェーンズ一家は、船体の左右に水車のような推進器をつけていた当時の最優秀蒸気船、「アメリカ号」に乗り、二十一日かかって横浜にやって来ました。東京の築地ホテルで熊本の野々口為志（ののぐちためし）から説明を受けて、仕事の内容を確認します。というのが、これは全くの偶然なのですか、ジェーンズかやってきたのと同時に、明治政府が「廃藩置県」の改革をしたので最初に示された条件が変わったのです。知藩事の細川護久も弟の長岡護美に地位を譲っていました。熊本の最初の計画では、士官学校のようなものをつくるはずだったのが、出来なくなったのです。しかし、熊本のせいではない、国の方針が変わったのだと考えたジエーンズは、熊本に行くことを決めます。前知藩事の細川護久が計画してくれた歓迎会などの催しを断り、はやる心を抑えて海路、九州へ向かいました。途中の神戸から、熊本洋学校で使う教科書等の注文をアメリカに送ります。九州までの途中に通った瀬戸内海の美しさに満足しながら、長崎に着きました。環境が文化の発達に大いに影響を与えるという考えを持っていたジェーンズには嬉しい風景でした。長崎からは「ノモ丸」という船に乗って熊本へ向かったのですが、嵐に遭い四日間もかかって白川河口の百貫港（現在の小島町）へ着いたのです。当時は船で長崎から小島へ来るのが、一番いい方法だったのです。

ジェーンズ一家到着の知らせは、すでに熊本に伝えられていて堤防の上には黒山の見物人が、軍隊と警察の手で整然と整理されていました。熊本の人は、亜麻色の髪をした、初めて見る外国人を、大きな驚きの目で見つめていました。特にジェーンズの二人の子どもたちを可愛いと感じて子どもに関心があったようでした。その中を白川に沿って熊本へ向かったのです。上陸した日の天候はよく、ジェーンズ一家には途中の景色は美しい眺めと映りました。稲田とキビ畑を見ながら、カンショ、ダイコン、ナス、カブがよく手入れされた畑の横を通り過ぎていきます。ジェーンズは熊本の農業は素晴らしいと最初は感じました。道の反対側から来る牛車、荷車、牛、子馬、雄牛、見物に集まった男女や子どもを整理する二人の先導の後に、馬に乗った侍の護衛がつきました。その後に長岡護美から贈られた馬に乗ったジェーンズと三台の「かご」に乗った家族が続き、役人や銃で武装した歩兵隊等の後に市民が歩いて、約四百メートルほどの列で熊本の城下町へ入ったのです。ジェーンズの馬を操る技術はたいしたもので、馬は軽快に歩き、熊本の武士の技術と差があったようです。そして熊本城の広い堀にかけられた橋を渡りました。ここで大勢の一般の人たちは公式の行列から離されました。誰も橋を渡るのは許されなかったのです。こうしてジェーンズ一家は熊本城内にある住居に着いたのでした。

ジェーンズ物語

連載５　まず英語から

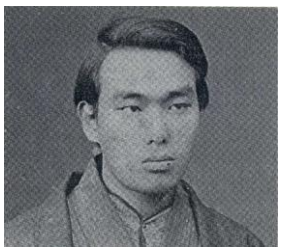
ジェーンズ邸前館長　黒田孔太郎

ジェーンズ一家が熊本に来た時には、学校の校舎もジェーンズ邸も完全にはできていませんでした。ジェーンズはジェーンズ邸建築に参加し、暖炉と煙突をつけさせました。日本の住宅の換気の悪さを感じたのでした。校舎もまだできていないので、城内の誰も住んでいない屋敷を仮の校舎として、洋学校を開校することにしました。

洋学校に応募した者は約五百名で、熊本県以外からの応募もありました。その子どもたち（十歳から十五歳まで）に試験を行い、最初の入学を許されたのは四十六名でした。ジェーンズは五年間で約二百名の生徒を育てました。写真は完成した熊本洋学校です。

殆どの生徒は西洋人を見たことかありませんでした。ある生徒は「皇国人（みくにびと）の人は屈曲自在なれ共、異人の足は然らず。あたかも竹筒の如し」と教えられていたので、ジェーンズの膝が曲がるかどうかをじっと観察したのでした。そしてアメリカ人も日本人と同じと分かって安心したのでした。ジェーンズにも不安かあったのですが、クラスの生徒たちの西洋知識への意欲と渇望を感じると、違和感はなくなってしまいました。ジェーンズはこの生徒たちに英語で教えることを決めていました。二人いた通訳の英語力はジェーンズの意を伝えるには不十分だと思ったのです。さらに英語を学ぶことが、通訳抜きで外国の文化等を直接学ぶことにつながると考えました。

教科書は青表紙のウェブスター版（木版）を使いました。まずアルファベットと発音の練習です。ジェーンズは英語の発音の指導に着手して、日本語にない発音があることに気づきました。ＬやＴＨ等でしたが、ジェーンズには、英語文化圏以外の人でも学習することによってどんな微妙な発音も分かり、正確で完全な美しい英語を話すことができるようになるという信念がありました。しかし習う側の子どもたちには大変だったようです。教え子の一人、下村孝大郎（写真左）は「ＢＡをべーと、ＢＥをビーとＢＩをバイとなぜ読むのだろう」と考えましたが、「とにかく覚えないといけないので必死だった。辛かった。」と言っています。ジェーンズは自分が学んだウェスト・ポイント士官学校方式の勉強をさせます。それは成績順に教室に入ってきて、成績順に机に座らせたのです。毎日机の位置が変わるので、生徒たちは真剣に勉強します。これも下村孝大郎の言葉です。



「ある日、大尉はクラスを二つに分割して、成績の下半分を見込みなしとして、退学させました。その境界が私と次の生徒の間に引かれたのを知ったとき、私がどんなに身の毛がよだつ思いをしたか想像がつくでしょう。勿論、私はこのことで怖くなり、ひたすら勉強に打ち込みました。それからというもの、単語という単語を必ず暗記し、しかも教科書の配列どおりに記憶さえしました。」こう述べています。

ジェーンズ邸には当時の生徒たちが英語で書いたノートを展示しています。

ジェーンズ物語

連載６　厳しい学習や生活

ジェーンズ邸前館長　黒田孔太郎

ジェーンズは 12 月に県当局へ教育計画を提出しました。４年計画で、世界の中でも最高水準の知識を学ぶことが出来るようにと１日に５、６時間の授業を行うようになっていました。

明治維新期の開国に積極的に参加できず薩摩、長州、土佐、肥前に遅れをとり、焦りを感じていた肥後の国は「洋学校を作ってアメリカから優秀な教師を呼び、肥後の若者を日本の有為な人材に育てよう」と言う横井大平の言葉でジェーンズを呼んだものの、具体的にはどうしていいか分からず、ジェーンズが教育内容や計画を一人で考えたのでした。

海老名弾正（幼名　喜三郎　左の写真）の回想です。海老名は、福岡県の柳川藩校伝習館で「神童」と噂されるほどの評判の少年であったのですが、伝習館の「漢学」中心の学問に飽き足らなくなり、肥後の「熊本洋学校」に入学したのでした。ジェーンズの薫陶でキリスト教思想・日本文化・政治・社会・教育の問題を論じ、思想界に著しい影響を与えました。後に京都の同志社大学の総長にまでなった人です。

「朝起きるのは、５時あるいは６時に定まって、鐘の音と共に起床せねばならなかった。食事の鐘がなるのが７時、一同は整列して、寮長に率いられて食堂へ行く。食堂にはテーブルがあり一人で先に食事をしてはならない。鐘が鳴ると揃って食べる。大抵済んだと思う頃、鐘を鳴らす。そうすると食事をやめる。遅れて食べていてはならぬ。更に鐘が鳴ると、一同立ち上がり食堂から帰る。それから今度は整列しないが、校庭にでる。再び整列し東に向かって深呼吸する。それから列をやめて、自由に学校の近所を散歩する。その後寄宿舎に帰って、各自の部屋の前に立ち、寮長が『グッド・モーニング』と英語で挨拶して部屋に入る。授業の鐘が鳴る。それから整列して、成績順で教場に入る」と述べています。

着席するとジェーンズが入ってきて挨拶をした後、授業が始まるのです。午前は８時から１２時まで、午後は１時から４時までで昼食の１時間が休みでした。

クラスを幾組かに分けてその内の１組を別室で１時間ほど少人数で教えます。その他の組は自習です。２年目からは上級生が下級生の先生役をしました。ジェーンズが常に言っていたことですが、「勉強の内容は教えない、勉強の仕方を教える」ことが徹底されました。自分たちで調べた結果をジェーンズが訂正する方式がとられました。これも海老名弾正の言葉です。「数學の如きは、一つも先生からならはなかったと言っても良いのであります。たった一度だけどうも解釋がつかない事があった。其の時だけどうしても出来なかったので、ゼエンス先生に聴いた事がある。さうするとゼエンス先生は斯ふ云ふわけだと言って説明して下さった事がある。その他は殆ど一つも教へて貰った事がない。皆な自分で解釋したのであります。自習的であります。」

自習中はジェーンズが鋭い目で部屋を常に監視しています。私語もありません。みんな黙々と勉強に励んだそうです。ジェーンズは５年間に２日だけしか休まなかったので、生徒たちからの信頼と父親に求めるような尊敬の念が増えていきました。厳しい授業内容を理解して、最後まで退学させられず無事に卒業できた生徒は１回生は僅かの 11 人、２回生も 11 人でした。この人たちは「ジェーンズのやり方は荒っぽかったけれど、効果的だった」と言っています。

全寮制でしたが、その生活も規則正しい厳格なものでした。禁酒・禁煙、時間厳守は絶対で、便所に行くときにも寮長に申し出て使い、寮長が使い方を点検しました。使い方が正しく出来なかった人には厳しい罰がありました。更に規律や統制を乱すものに対しては容赦ない退学が待っていたのでした。

ジェーンズ物語

連載７　発展する学習内容

ジェーンズ邸前館長　黒田孔太郎

毎日が試験という、厳しい授業に耐えた生徒たちの英語の能力は、めきめき進みました。生徒たちは読本に取り掛かると、綴りを覚えるのにあれほど苦しんだ単語が、次から次へと出てきて、読むのを面白いと感じたのでした。最初に読んだのは、子ども向けの道徳的な教訓の物語でしたが、生徒たちには西洋思想との初めての出会いでした。儒学を学び、「道徳は東洋が優れていて、西洋からは科学技術だけ学べばよい」、と思っていた若者たちは『アメリカ人にも道徳心があり、日本人よりも情が深いかもしれない』と、大きな驚きを感じたのでした。一年目に英語（綴り字、文法、読本）に全力を挙げさせたジェーンズは、二年目には地理、歴史、数学を三年目には代数、幾何、三角法、歴史、四年目は哲学（物理）、天文学、地質学、化学、生理学、英文学を教えました。このほか二年目からは土曜日には作文、対話、朗読、演説まで行いました。（写真は最初の教科書、ウェブスターのスペリングブック　ジェーンズ邸展示）

各科目は生徒たちの視野を広げていきました。地理では『横浜から、太平洋、北米ロッキー山脈、サクラメント川、ミシシッピー州、南米アンデス山など世界が目の前に現れてきた』と感じ、幾何には『論理』を、歴史では『エジプトから始まりその文明がナイル川に根拠をおくこと』を、物理や化学では『空気が生きて来て、自然界には偶然がない』ことを知ったのでした。生徒たちが勉強するのに熱心になってきたので、ジェーンズの教え方にも熱が入ってきます。ジェーンズはアメリカの親戚にあてた手紙の中で、『生徒たちのこれまでの変化はすばらしいし、その進歩には驚くばかりです」と述べています。

当時の洋学校生には数学を軽んじる傾向がありました。武士の子、あるいは豪農の子として育った彼らは、数学は商売をするために必要な計算力を付けるためのもので賤しいものだと思っていたのでした。そんな彼らにジェーンズは次のように言ったそうです。『銭勘定のために算術を教えるのではない。考えるという癖をつけるために、予は諸君に数学を教える。何事についても注意して考えねばならぬ。それには数学が一番いい』。

ジェーンズは演説教育にも力を入れました。当時の日本で演説教育を行ったのは、西では熊本洋学校と東では慶応義塾の二校だけでした。慶応義塾では、福沢諭吉が日本語の演説を学生に課していましたが、洋学校では英語の演説を課したのでした。「将来、日本にも国会が開設される。人前で演説することが必要になる。演説は技術でなく、精神であるので精神修養によい」ということで始めたのです。その内容は英米大家の文章を暗誦して発表させるものでした。これは生徒たちには意外と気持ちが良かったらしく、あるときには学者の「ウェブスター」の気持ちになり、あるときには歴史家「マコーレー」の気持ちになって話したそうです。

更に生徒たちが日本の政治について批判でもすると大変しかったそうです。当時の若者たちが政治家や軍人にあこがれるのをジェーンズは好みませんでした。公共の福祉の世界で生きることが人間にとって最も望ましいことと思っていたジェーンズの考えがあらわれています。

二年目、新しい生徒が入学してきます。生徒数が増えたので、ジェーンズは一人で教えるのが、困難になりました。そのために班別学習を取り入れ、二年生の成績の優秀なものを助手として任命し、班の下級生の指導に当たらせました。この助手に任命されることは素晴らしい光栄でしたが、やり方が悪いと容赦なくみんなの前で叱られるので、大いに勉強しなくてはいけませんでした。しかしこのことが又、驚くほどの大いなる進歩に役立っていったのでした。

ジェーンズ物語

連載８　男女共学（一）

ジェーンズ邸前館長　黒田孔太郎

洋学校が発足して四年目を迎えました。毎日が試験という厳しい勉強に耐えた洋学校の生徒たちは周りが目を見張るほどの学力を身につけていきました。ジェーンズがアメリカの同年代の若者にも負けていないというほど素晴らしい成長をしていたのです。

この洋学校で学ぶ生徒の中には、京都で暗殺された横井小楠の長男で、第三代同志社社長、衆議院議員を務めた横井時雄（ときお）がいました。また、ジャーナリスト、政治家、歴史家で有名な徳富猪一郎（後の蘇峰）もジェーンズの教えを受けていました。この時雄には「みや子」という妹が、蘇峰には「初子」という姉がいたのです。

洋学校の生徒はほとんど横井小楠を尊敬する人たちの子どもたちでした。親の考えも進歩的です。女子にも教育を、と考えた人たちはジェーンズ夫人のハリエットにその願いを託しました。ハリエットは洋学校の生徒の姉妹であることを条件として、週に２、３回教えることを引き受けました。しかし、このジェーンズ夫人塾の生徒は何か支障が生じて、一人減り、二人減りして、ついにみや子と初子の二人になってしまいました。それでもみや子と初子は一緒にハリエットについて勉強をしていたのですが、ハリエットがお産をしたために、ついに学びの場所がなくなってしまいました。しかし、この二人には特に学習意欲がありましたので、時雄は、ジェーンズに二人を男子生徒と一緒に勉強させてもらえないかと頼みに来ました。

その当時の日本には「男女七歳にして、席を同じうせず」という考えがあり、さらに男尊女卑の考えが行き渡っていたのです。女性は家を守ればよい、料理や裁縫が上手ならそれでよい、という考えが一般的でした。しかし、ジェーンズには日本もいつかどこかで男女共学を始めなくてはならないという考えがありました。彼女らの親もこの考えに賛成していることがわかり、また、県当局からも許可が出たのでジェーンズは即座に新学期からの入学を許可しました。そして時雄に、自分の力の及ぶ限り、彼女らを守ることを約束したのでした。

四年目を迎えた学校では女子生徒二人を交えた新しい学年の授業も始まりました。しかし、教室では彼女たちは孤立して教室の隅に座っていました。男子生徒たちはできるだけ彼女たちから離れた席に着こうとして、中には、はみ出して通路の床に座っている者もいたのです。当時の日本人の女性に対する考え方が表れている光景でした。

ジェーンズは生徒たちに向かって、婦人に優しくし、弱いものを助ける騎士道精神を説き、人の心は男女同じであり男性も女性も同等の資格と権利を持っていることを説きました。「機会と権利を与えられたアメリカの女性には素晴らしい才能を開花させた人がいます。もし日本で女性に教育を受ける権利や機会を与えないなら、片足を縛ったまま片足で競争するのと同じなのです。心の半分を縛ったままの状態では西洋諸国にはとても追いつくことはできません。一人前の男は、他人を残酷に押しつぶしたり、その権利や希望の下に踏みつけることによっていい気になったりするようなことはしないのです。もしも君たちが私に教えてもらいたいと思うなら、その同じ権利をこの二人の少女にも認めてほしい。彼女たちはいわば私の子どもです。私の小さな娘がここに入ってくるときに敬意を持って彼女たちを取り扱ってほしい」そう、力説しました。

しかし、長年染み付いた男尊女卑の風習や考えは、容易には改められそうもありませんでした。男子生徒からは日増しに不満の声が上がってきました。ある日一人の男生徒がジェーンズを訪ねて来ました。隣の福岡県の柳川から来ていた柳川の神童と呼ばれていた海老名喜三郎でした。

ジェーンズ物語

連載９　男女共学（二）

ジェーンズ邸前館長　黒田孔太郎

新入生指導者代表の海老名喜三郎（後の弾正）はジェーンズに言いました。「私達には、女は男よりも劣っているという感情がどうしてもあります。当然、女が男の領域に踏み込んでくることは感心できません。女は男の仕事は出来ませんし、自分白身の仕事もおろそかになってしまいます」

それに対してジェーンズは「女に男の仕事が出来ないとどうしていえるのだ。長い封建時代に男たちがやってきた愚行よりもましなことを女たちが出来ないとどうしていえる？。女に啓蒙の機会が与えられ、女が自らを解放したときに自分自身の義務を裏切ったことがありますか」と切り返しましたが到底決着はつきませんでした。

後日数名の男子生徒がジェーンズの家にやってきました。また論争が始まりましたがなかなか男子生徒たちは納得しません。「なぜ共学が必要ですか。もし女性に教育が必要なら、女子教育のための学校を作ればよい。洋学校が軌道に乗ってきたのに、無理に女子を入れることは学校の存立を危うくします」と言いました。

「女子を入れたり、共学の制度をとるのは、無理にそうしているのではないのだ。それは自然であり必然なのです。女子教育の学校といっても、肥後の男たちが今もっているような偏見を持ち続ける限り、そのような学校は日の目を見ないだろう。アメリカでも奴隷に読み書きを教えることは罪悪と考えられていたのと同じだ。日本でも精神と道徳の奴隷制をやめなければならないのです。もし私が肥後で命を落とすことがあるならそれはこの学校の生徒の半分が女子になってからにしてもらいたいものだ。そのときの私の死は女子教育に対する愚かしい偏見を一掃するための警鐘ともなるだろうから」とジェーンズも熱心に説得します。次から次へと出てくるジェーンズの言葉に生徒たちは諦めかけましたが新入生を指導する役目であった海老名弾正は「私は女子の先生になろうと思ったことはありませんでした」と撫然として言いました。

「もし、女子に教えることがいやなら頼まないが、女をさげすむ男が、母を持ったり、妹を持ったり、まして妻を持ったりすることは不自然でないか。そういう男は、女の手で用意されたご馳走を口にせず、女が縫った衣服など着ず、その笑顔で温かくし、その心からの純粋な愛情で清浄にする住まいに起居を共にしたりしない方が、より似つかわしいのだ」「君が子どもの時にお風呂に入れてもらって体をきれいにしてくれたのは誰だ。君のお母さんではないのか。君のお母さんは男か女かどっちだ？マン、オーア、ウーマン」。海老名は母親を殊更に尊敬していましたのでこれには言葉を返すことはできませんでした。

「分かりました。先生の命令の通りに従います」とようやく男子生徒たちは引き下がりました。

この二人の女子生徒、「徳富初子」（写真右）と「横井みや子」（写真左）は残りの二年間を真剣に勉学に励みました。彼女たちは英語やその他の学科でも優れた成績をあげました。またその存在が学校全体に、人間的で純粋な、大変好ましい雰囲気をかもし出したとジェーンズは述べています。このようにしてわが国で最も早い男女共学が熊本洋学校で始まりました。今までも寺子屋で女子にも教育の機会は与えられていましたが、高度な教育では日本最初といわれています。

横井みや子は後に同志社大学の総長となった海老名弾正と、徳富初子は群馬県議会議長の湯浅治郎と結婚し、女性の地位向上に努めました。

ジェーンズ物語

連載 10　教師館と煙突

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

熊本洋学校には授薬用の校舎と、自習用の講堂、そして全寮制の寄宿舎が並んでいました。この寄宿舎の隣にジェーンズ邸はありました。現在古城にある県立第一高校の体育館のそばです。ジェーンズ邸の北側の屋根に煙突があります。この煙突にはジェーンズの日本の住まいに対する考えがこめられています。

ジェーンズが来日したときには、ジェーンズ邸はまだ完成していませんでした。その洋館に煙突がないと分かった時にジェーンズは煙突をつけるようにと強く主張したのでした。

「熊本の家のかわらの屋根や､壁の裂け目からもれ出る煙は非常に原始的な調理の方法と手段を示したものだった。寒くなり寒気が迫ったときに、私たち家族のために大きな凝った模様入りの火鉢を用意してもらったが、その木炭から出る煙のために私の家族はみんな苦しんだ。千年もの間こんな生活を続けてきた日本人に同情の念が起きた。」と後で回想しています。従来の日本人には最高の暖房具だった火鉢はジェーンズ一家にとっては不健康で命の安全さを脅かすものでしかなかったのです。

当時の熊本にはレンガはなく、レンガ職人もいなかったのですがジェーンズは熊本の材料に目をつけました。ジェーンズ邸建築のためにいた大工に豊富な量の凝灰岩をレンガ状に切らせて、それを石垣積みの技術で積み重ね見事な煙突を遺らせたのです。この煙突はその後の台風や地震にもびくともしませんでした。ジェーンズは建設途中だった洋学校の寮と台所にも煙突をつけるように言いましたがこちらは実現しませんでした。

ジェーンズの頭の中には日本人の日常生活の向上と改善という考えがいつもありました。ジェーンズは日本の住まいの改善のために、このジェーンズ邸を開放して熊本の人々に家の中を見せることにしました。するとこの珍しいハイカラな建物を見ようと、弁当持参の人たちが県内各地からやってくるようになりました。ジェーンズはどの部屋もどんな設備も自由に開放し、どんな質問にも、丁寧に率直に答えました。無礼な質問は一度もなかったそうです。

ジェーンズが熊本にやってきたときにこれをよからぬことと思っていた人たちが、当事の熊本に少なからずいました。日本は世界で最も優れた神の国と考えていた人たち、いわゆる攘夷家といわれる人たちです。ある日そうした不満分子の主だった指導者の数人がジェーンズ邸にやってきました。不愉快そうに部屋の中をじろじろ眺めたり、何か物を手にとって調べたりしたのです。学校の警備の武士や生徒たちはすっかり動揺し、一斉に緊張感が漲りました。しかしジェーンズには、自分のしていることが社会に必要なことで、その動機と願望を恐れずに率直に話せば分かるという確固たる信念がありました。ジェーンズは落ち着いて対応したので騒ぎはそれ以上大きくなりませんでした。

家事を担当する婦人たちが訪問者である時には、寝室や台所にも案内しベッドの通気性や快適さ、清潔さ、西洋風の調理法の合理性や栄養への配慮などを説明しました。また子どもたちが病気で亡くなることが多かったために清潔に子どもを育てる方法や、健康に育つための食事の話などもしました。そして清潔な住まいの基礎に煙突の重要性を説いたのでした。この煙突は現在レプリカとして残っています。ジェーンズ邸の一段下にある駐車場から見ると屋根の左側に見えます。外観は当時のままと思われます。

ジェーンズ物語

連載 11　西洋野菜の紹介・栽培

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

ジェーンズが日本にやってきたときに考えていたことがありました。それは学校の活動とは別の形で、文明の恩恵を周囲の人たちに分け与えることでした。

熊本に初めてきた日、小島の百貫石の港から熊本城へ向かったジェーンズ一家は白川沿いの稲田とキビ畑の横を通り、サツマイモ、大根、茄子等の手入れがよく行き届いた畑を見て、日本人はアメリカに農業を教えるべきだと考えました。日本の農業はとても素晴らしいと考えたのでした。しかし、そのうちに、日本人は耕作に時間をかけるものの、野菜も果物もキメが粗く味がなく栄養分も少ないと感じるようになりました。栽培する作物の種類は少なく、同じものを繰り返し栽培し、改良しようという考えがないことにも気づきました。馬糞や糞尿の施肥はしきりに行われているが、そのことが逆に作物が茂りすぎて風味と質がよくないと感じたようです。味があまりよくなく大量の塩や醤油を使うので健康を害する元になると考えました。そこでアメリカから西洋野菜の種を十分すぎるほど取り寄せてつくって見せることにしました。日本へやってきたときに、東京で、ある友人から「日本の野菜は質が悪いので、食べられる野菜を用意しておく必要がある」と言われたことを思い出しました。その忠告が具体的に分かったのでした。

当時の知藩事は長岡護美（もりよし）公に代わっていました。護美は洋学校を設立した細川護久（もりひさ）の弟で護久の後を継いでいました。ジェーンズが屋敷の一部を菜園にしようとしていることを知った護美は「心配しないでください。私が毎日あなたの所に野菜を届けさせますから」と言いました。ジェーンズの教え子たちも、不思議に思いました。当時の考えでは野菜づくりは百姓のするものという考えだったのです。しかしジェーンズにとっては、そういう配慮はかえって迷惑だったのです。ジェーンズは教師館と城の外壁の間に約十アールの畑を用意して野菜を作り始めました。

ある日ジェーンズは思いがけない団体の訪問を受けました。それは地元の園芸組合の責任者である竹崎茶堂と幹部一行の正式の訪問でした。彼らは「耕耘社　こううんしゃ」という園芸組合をつくり、熊本市の近くに実験農場を持っていました。礼儀正しく、彼らの事業の発展にいろいろな援助を仰ぎたいという趣旨の挨拶を行いました。ジェーンズはこの訪問に大変満足しました。まさにジェーンズの望むところだったからです。竹崎茶堂は熊本の女子教育に多大の功績を遺した竹崎順子の夫です。ジェーンズは十分に用意した野菜の種子を気前よく園芸組合の人たちに分け与えました。耕耘社の人たちは郊外に広い畑を用意し、種のまきつけから管理までジェーンズのやり方を見て新しい野茶づくりに取り組みました。この農場でジェーンズが紹介した作物がどんどん栽培されて西洋野菜の普及に力を尽くすことになりました。

在来種の「火打石の様に硬い豆」の代わりにエンドウを、「猛烈にくさいニラ類」の代わりに玉ネギをつくりました。他にはキャベツ、カリフラワー、レタス、オクラ、とうもろこし、ジャガイモ、トマト、スウェーデンかぶ、メロン、ピーナッツ等を紹介しました。これらの野菜は熊本の野菜の仲間入りをしたのです。私たちが現在食べている野菜のほとんどはジェーンズが紹介して普及させたものだったのです。さてジェーンズは従来からあった野菜のいくつかを「火打石の様に硬い豆」、「猛烈にくさいニラ類」と呼んで嫌っていますが一体これは何でしょうか。私にははっきりとは分かりません。

ジェーンズ物語

連載 12　ジェーンズと関わった人たち

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

前号で述べた園芸組合は「耕耘杜」（こううんしゃ）と呼ばれていました。中心となっていた人は竹崎茶堂（たけざき　さどう、幼いときは律次郎）という人です。横井小楠の門下生で、当事の熊本を改革していた人でした。茶堂は新しいものをどんどん取り入れていった人で熊本の農業の発展に大きな尽力をした人です。この茶堂の妻は、熊本の女子教育の先駆者となった、あの竹崎順子なのです。ジェーンズは農業等を通して茶堂と話が合うので特に親しくしました。洋学校の生徒が通訳となって話を交わしたのですが二人は夢中になって時間がたつのが分からなくなるほど農業の話をしたそうです。茶堂は胃弱だったためにジェーンズが勧める洋風の衣食住を喜んで取り入れていきました。

竹崎律次郎

それでは、ここでジェーンズの教育に理解を示して協力し、関わりがあった主な人たちを紹介しましょう。その殆どが楠井小楠に関係ある人で実学党と呼ばれていた人々です。

楠井小楠には三高弟と言われる門下生がいました。竹崎茶堂の他は次の二人です。

・徳富一敬（とくとみ　かずたか）

水俣市に生まれました。子どもに徳富蘇峰（そほう）、徳富蘆花（ろか）がいます。茶堂と共に明治政府に細川護久を熊本の知事として派遣するように要請し熊本の文明開化に尽力しました。

・矢嶋直方（やじま　なおかた　別称　源肋）

益城町、木山に生まれます。有名な矢嶋家の女性たちの兄にあたります。この矢嶋家から熊本の猛婦と呼ばれた矢嶋楫子を始めとして当時の日本の女性の地位向上運動に尽力した女性が多数生まれました。

ここからが興味のある組み合わせになっていくのですが、横井小楠と矢嶋直方の妹「つせ子」が結婚します。徳富一敬は矢嶋直方の妹「久子」と結婚します。最初に述べた竹崎茶堂は矢嶋直方の妹「順子」と結婚します。横井小楠、竹崎茶堂、徳富一敬は矢嶋直方の妹たちを通して親戚になったのです。そして横井小楠・つせ子の長男、横井時雄と長女、横井みや子がジェーンズの洋学校で学びます。徳富一敬・久子の長男、蘇峰（幼名、猪一郎）、次男、蘆花（幼名　健次郎）二女、初子もジェーンズの敬え子です。つまり矢嶋家を通して横井小楠、徳富一敬はジェーンズの洋学校の保護者となり、竹崎茶堂はジェーンズの農業の理解者となるのです。

しかし、横井小楠は前述したように明治２年の１月５日に京都で暗殺されたために生きているうちにジェーンズと会うことはありませんでした。また小楠の甥、横井大平が洋学校設立のために全生命をかけて働いたことも前述したとおりですが、この太平も洋学校ができる五ヶ月前に肺核校で亡くなっているのでジェーンズとは会うことはありませんでした。

横井大平の兄の、横井佐平太は、大平と一緒にアメリカのラットガース太学で勉強します。佐平太は肺結核にかかった大平を看病するうちに、やはり結核に感染、帰国後、元老院書記官になりますが、肺疾が進み三十一歳という若さでなくなります。

熊本が生んだ文化人「福田令寿（よしのぶ）通称（れいじゅ）」氏は海老名弾正が校長をした「熊本英学校」で勉強しました。ジェーンズの孫弟子に当たります。素晴らしい関係ですね。

ジェーンズ物語

連載 13　熊本にパン

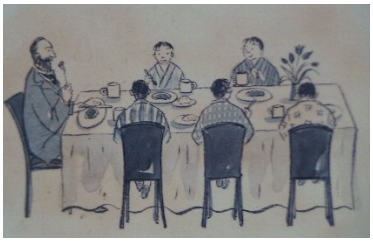
前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

ジェーンズは心身の健康や栄養の面で日本の食生活に疑問を持っていました。

ジェーンズの伝記といっていい「アメリカのサムライ」から引用します。

「千年の間パンを知らなかった国民。穀物ときたら小麦も粟も米もべとべとに消化の悪い糊の様に煮立ててしまい、それをタンニンとカフェインを煎じ出した番茶で流し込んでいる国民。必ず醤油をかけ、梅漬けにし、せっかく自然が差し出す魚も塩漬けにし、かと思うと、樽いっぱいに大根を漬け込んで過剰保存にしてしまう国民」と熊本での食生活を表現しています。当時の熊本を治めていた長岡護美やジェーンズと親しかった竹崎茶堂はパンの素晴らしさを知っていましたのでジェーンズに質問をしています。「小麦は手に入るのですが質がよくないと思います。よいパンができるように改良できると思いますか？」

この質問はジェーンズには大変うれしい質問でした。ジェーンズは一人で実験してみました。米屋に小麦を注文して開けてみたら泥や砂が混じっていました。しかし小麦の質は悪くないと思い、大きな桶に小麦を一袋いれ、水をあふれさせました。もみ殻、だめなもみ、ほぐれた泥を洗い落とし、底の砂をふるいですくい出しました。そして残った小麦を天日で乾かしたら、表面の水分はすっかり乾き、丸々した望みどおりの小麦になったのでした。数日後古い水車があるところへピクニックの誘いがあったので、ついでに小麦を持っていって挽いてもらったのです。「なんともいえない原始的な水車」だったので三回挽かせました。その結果、まずまずの小麦粉ができました。ジェーンズはこの小麦粉を使って、ジェーンズ邸で働いているお気に入りのコックに焼かせました。「混じりけなしの熊本産の小麦粉」でつくったパンはかつてジェーンズ一家の食卓にのった、どのパンよりも甘くおいしく栄養も十分だったとジェーンズは述べています。以後、この一家には、アメリカから取り寄せるゴールデン・ゲイト粉はいらなくなりました。更にジェーンズ邸のコックの友人がパン屋を開き、パンを焼いて町中に売って歩いたのです。このパンは一般の人、粗食に飢えていた洋学校の生徒や、体力の弱い人に歓迎されました。



ジェーンズは「生産初歩」という本を書いています。これは熊本県からの要望に応じて熊本の望ましい殖産興業について書いてあるものです。その中に「人民蒸餅ヲ食トスルニ到ラバ‥‥（途中略）然ル時ハ蒸餅ト米ト相ナラビ肥後ノ食物トナラン」と述べています。蒸餅というのがパンのことです。つまり熊本人がパンを食べるようになったらパンと米は熊本の立派な主食となるだろうと書いているのです。

パンは、当時の熊本では一種の「厄除けと、薬」として魅力があったようでした。それはジェーンズが常に健全な食事と健康の関係を繰り返し説き続けていたからだろうといわれています。徳富蘆花によると、竹崎茶堂は胃弱のためコンデンス・ミルクをスプーンですくいながらパンを食べるのが好きだったそうです。ジェーンズの教えを尊敬する茶堂が周囲の人に勧めるので、健康食としてのパンが普及していきました。ジェーンズは「米や炊いた大麦でなく安くてうまいパンをほしがる人に、街頭から郊外まで配られていったから、パン焼き家は突然成長産業になったのである」とも言っています。また農業関係者たちは小麦作りへの意欲を大いに高めました。

ジェーンズ物語

連載 14　西洋鋤の活躍

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

パンの普及に伴い、耕耘社（こううんしゃ）から、水田を麦畑へ転換することの相談がジェーンズにありました。しかし、ジェーンズは否定的な考えをもっていました。日本の米、特に肥後米は輸出に最適な素晴らしいものと考えていたのです。次の文章はジェーンズ著の「生産初歩」という本の中で述べているものです。”諸役人及ビ農夫屡（しばしば）余ニ問フ米ノ代リニ如何ナル食物ヲ植ヘテ然ル可キ乎ト　余思ヘラク其ノ患ハ米ノ多キ故ニ非ズ　米ハ肥後産食物中ノ最モ宜キ一ニシテ殊ニ世界中肥後米ニ勝ルナシ”。人々が米の代わりに何を植えたらよいかとたずねると「米は熊本の産物の中では最もよいもので、特に肥後米は世界でも一番すばらしい」と書いて絶賛しています。近年、熊本産の米が日本一という評価を受けました。ジェーンズは誰よりも早くから熊本の米の素晴らしさを認めていたのでした。

さらに、馬に乗って日常的な散歩をするうちに、未開墾の肥沃な土地がたくさんあるのを知っていたから土地を開墾して米を始めとした作物を栽培することを考えていました。しかし、そこには雑草がびっしりと頑固な根を張って熊本の農家の前に立ちふさがっていたのです。これらの土地は小麦、ブドウ、イチゴ、果樹等を栽培するのに最適だと思っていました。しかし、その当時の日本には水田の泥をかき混ぜる木製の鋤（すき）と、背骨が折れるような鍬（くわ）しかなかったのです。ジェーンズはすぐに、農機具等をアメリカに注文しました。そして道具が使い物にならなかったときには代金を自分で負担する考えを持っていました。後日、ジェーンズが勤務を終えて帰宅したところ、役人、耕耘社、人夫の人たちが黒山の人だかりをつくっていました。アメリカから送られてきた大きな荷物の包装が解かれたばかりだったのです。二つの西洋鋤（プラウ）、と馬に取り付けるための馬具、若干のつるはしと鍬などでした。熊本の人たちには生まれて初めてみるものばかりでした。

農具が着いてから最初の休日に、城から３㎞ほど離れた場所で西洋鋤の実験をすることとなり、例によって大群衆が見守りました。その中には洋学校の生徒たちの殆どが混じっていました。いざ実験を始めたときに思わぬことが起こりました。初めてそのような道具を見た馬が暴れだしたのです。ジェーンズは苦心惨憺して取り組みましたが、鞍を放り出し、無闇に足を蹴上げるか、そうでない時には地面に足をつっぱって一歩たりとも動こうとしなかったのです。ジェーンズは鋤を馬につけることは諦めて、気を取り直し皆と食事をしながら考えました。食後に、ジェーンズと一番親交のあった竹崎茶堂に丈夫なロープを手に入れてもらい、それを鋤に取り付け、四十人の洋学校の生徒に引っ張らせたのです。生徒たちは尊敬するジェーンズの頼みをすぐに引き受け、ロープを引きはじめました。その後ろからジェーンズが鋤を操作しました。草の根がびっしりはびこった頑固な土がすいすいとすき返され、予定していた上地の開墾は終わり、見ていた人たちからは感嘆の声があがりました。ジェーンズはこの実験を通して、アメリカがあの広大な土地を、殆ど無から出発して創意工夫、エネルギー、決意、知性、粘り強さで、原始林を開き、野火を鎮め、洪水を抑え危険な野獣から身を守り開拓していったことを、耕耘社の長老たちに説明したのでした。

この日の耕作風景は、参観者の脳裏に強烈な印象を与え、以後、毎年、春と秋のシーズンには二つの鋤がフルに活用され新しい耕地の開拓や農作業の能率化に貢献しました。ジェーンズは従来の人力に頼った農業から、馬や機械を使った当時としては近代的な農業を紹介したのでした。

ジェーンズ物語

連載 15　牛肉の普及

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

洋学校の運営は順調に進み、明治五年の六月、明治天皇九州巡幸の際に、明治天皇が洋学校の授業風景をご覧になるということまでおきました。この巡幸にあたって県当局はジェーンズ邸を天皇の行在所（あんざいしょ　宿舎）にしようと考えました。ジェーンズは最初は喜んでこれを受け入れましたが、「日本の最高の地位にある天皇が一外国人の住まいに泊まることは日本にとって恐れ多いことです。天皇の権威を落とすことになります。日本人の家がよいのでは。」と申し入れたそうです。周りの人たちはこの考えに大変感動したそうで、行在所は現在一新幼稚園がある「御客屋」となりました。現在の一新小学校の校歌にはそのことが謡われています。

さて全寮制で勉強を続けている生徒たちの中には食事の内容がよくなく、栄養不足でやむなく家に帰り治療をしなければならないものが出てくるようになりました。ジェーンズに相談に来た子の歯茎から血が出ているのが見えるのです。壊血病にかかる生徒や手足の関節が痛いと訴える生徒が増えたのです。

ジェーンズは「新鮮な牛肉だけが薬だ」と周りに説き、心配して渋る県側からの許可をもらいました。しかし、「肉屋があるわけでなく、どうするつもりですか」と懸念する県の幹部に「自分で肉は用意します」と答えました。ジェーンズは自分で３頭の牛を飼っていたのです。ジェーンズの牛が一頭殺されるようだと知ったジェーンズ邸の雇人たちは、どこかへ消えてしまいました。目の前で屠殺を見ることに耐えられなかったのでしょう。ジェーンズは耕耘社を通じて手に入れた牛を南北戦争のときに使った古い護身用の軍用拳銃で射殺し、熊本で探した二人の若者に解体を頼みました。二人は上手に解体をしてくれたので冬空に牛の四つ割がぶら下がったのでした。屠殺、解体が終わったときには例の外国嫌いの武士たちが、洋学校の下に集まり、悪口を言い交わし、扇子を使いながら、悪運を予言していましたが、ジェーンズはひるまずに仕事を進めました。ジェーンズは洋学校の生徒たちの病気を治すためだけでなく県行政の代表たちにも牛肉を使った開化食を食べさせることにしました。ジェーンズの言葉でいうと「日本の遠い山からやってきた牛のロースト・ビーフ」「カリフォルニアからやってきたジャガイモ」「肥後の山あいの滝の水車小屋で製粉された粉でできたパン」を県の役人に食べさせ、「肉と骨のついた大きな切り身」に「ざく切りのキャベツ、たまねぎ、ジャガイモ、庭で採れたトマト」を入れたシチューを洋学校の生徒たちには出したのです。それに日本人の好みに合うように大皿の上に米のご飯を出し、唐辛子まで添えました。育ち盛りの生徒たちにも十分な量で満腹になったのです。「シチューはまったく完全な薬となって奇跡を起こした。」とジェーンズは回想しています。生徒たちはこの食事を誰も嫌がらず、二、三週間、同様な食事を続けました。その結果、「塩中毒や壊血病」はあと形もなくなり、生徒たちの健康状態はよくなり生徒たちも奇跡と思ったのです。

当時の日本には牛肉を食べる習慣はありませんでしたが、熊本県ではこのことがあってから牛が定期的に屠殺され食べる習慣ができてきました。消費者の範囲が広がると熊本周辺にいる牛の値段も上がり、当局が値を下げるように指導をしなくてはならないほどでした。パン同様に牛肉が一種の医薬品として認められるようになると、肉を常置する店も出てくるようになりました。そして外国種の牛を輸入して肥後の家畜の質を改善しようとする本格的な努力も始まりました。

ジェーンズ物語

連載 16　熊本の牛乳生産

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

ジェーンズが日本の熊本に紹介し、広めた食べ物は西洋野菜、パン、肉ということを前号までに述べました。しかしジェーンズはこの他に牛乳生産にも力を入れていたのです。

肥後の農業組合、耕耘社の組合長、竹崎茶堂（熊本県の女子教育の先駆者、竹崎順子の夫）はジェーンズと大変親しくなりました。二人とも農業についての話を始めるとまったく時間がたつのを忘れてしまったそうです。茶堂は新しいものを取り入れることにはまったく躊躇しませんでした。胃弱のためにジェーンズがアメリカから取り寄せた缶入りのコンデンスミルクを常に愛用していました。そのため、ジェーンズは、茶堂がコンデンスミルクに満足して本当の牛乳はいらないと思いはしないかと心配したほどでした。

ジェーンズは肥後の山地部で飼われている現地産の牛から牛乳を搾ることを考えて、耕耘社を通して野生種の牝牛を手に入れました。この牛は出産後の事故で子牛を亡くしたばかりでした。牝牛が手に入って喜んだものの、この牛は雇人がどんなに努力しても質のよくない牛乳をほんの少ししか出さなかったのです。ジェーンズも一時は、この牛を送り主に返そうかと思ったのですが、このままこの牛を送り返してしまうと、悪しき前例になると考え、望ましい乳牛の特徴を前よりも詳しくはっきりとわかり易く指示してまた別の牛を注文しました。今度は見事に成功しました。毎日、牛によって 1.4 リットルから 1.8 リットルの新鮮な牛乳が生産されることになったそうです。熊本ではじめての牛乳生産ができたのです。竹崎茶堂はこれらのジェーンズとの交流の経験を元にして、明治四年に設立した私塾、「日新堂」で国語、漢文、数学、歴史等のほかに西洋牛の飼育や西洋農具、果樹栽培等を教えました。熊本洋学校は明治九年に閉校となるのですが、その洋学校の流れを汲み明治十年に設立された「広取学校」でも英語の授業を中心として西洋やアメリカの知識、文化を学ぶ教育が行われました。その日新堂や広取学校で学んだ高木第四郎（たかぎ　だいしろう　帝国牛乳協会会長などを歴任）が明治十六年に「高木弘乳舎（こうにゅうしゃ）」という牛乳会社を誕生させています。高木弘乳舎は一九四一年に熊本牛乳などと統合され熊本合同牛乳（現在の熊本乳業）となったため消滅しましたが、その後一九四五年に光永立身（弘乳舎創業者）が高木第四郎から「弘乳舎」の商号を譲り受けています。この日新堂と広取学校は当時の託麻郡本山村（現在の熊本市本山町）にあったため、本山村はその当時の文教の地として周りの人からは羨望のまなざしで見られていたといわれています。

弘乳舎

なお、ジェーンズが最初の乳の出が悪かった牝牛を送り返さずに飼ったのには理由があったのです。乳牛としては合格しなかったので前号で述べた肉牛として使うことを考えていたのでした。洋学校で勉強を続ける生徒たちの中から、壊血病等で体調を崩すものが出てきたのです。彼らがこれを治療するために家に帰ることを訴えてきたとき、全くうまい具合にジェーンズの思いはかなうことになりました。寮の一汁一菜に近い食事を続けていてはこの病気は治らない、牛肉と野菜が必要だと考えたジェーンズは、今でいうシチュー風の食事をつくって生徒たちに食べさせたのです。結果はジェーンズが思っていたとおりになり、病気は全快しました。乳牛としては役に立ちませんでしたが、肉牛として立派な役目を果たしたのでした。

ジェーンズ物語

連載 17　ジェーンズが勧めた農産業

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

ジェーンズは竹崎茶堂と次第に親しくなっていきました。洋学校より先に始まった熊本医学校にはマンスフェルトというオランダ人の軍医が長崎から招かれていたのですが、茶堂はもっぱらジェーンズと親交を深めていきます。二人は心から野良仕事が好きでした。ジェーンズが畑で茶堂と熱中して相談事をしている姿を教え子たちはよく見かけたものです。こういうときには洋学校の生徒が通訳となりました。

ジェーンズは当時の熊本には工業よりも農業の発展が先だと思っていました。「米」「絹」「茶」の生産に力を入れるように勧めました。日本の農産物には辛い点数をつけていたジェーンズが日本の米のよさは例外的に認めていました。特に肥後の米は世界で最も優れているといっています。そこで農具を改良し、鋤や鍬で深耕していけば、米の生産も拡大できると考えたのです。茶堂たちはこの忠告を守って特に生糸生産に力を入れました。茶堂の弟子の長野濬平（ながのしゅんぺい）は九品寺にあった演武場を桑畑にして養蚕製糸場をつくり、後に横井小楠の弟子、嘉悦氏房とともに緑川製糸場を設けました。徳富一敬の二女、みつ子の夫の河田誠一は刀剣書籍を売り払って、熊本最初の絹織物工場を建てました。明治十八年には全国の生糸産出高の一〇パーセントを熊本が生産したのでした。

また、茶は外国との貿易可能な特産品と思っていました。特に品質をよくするようにと注意し、目先の利を追うのではなく熊本産の最良のものを肥後特産とはっきり記した箱に入れて輸出すべきだと生産者に呼びかけたのでした。

一八七三年（明治六年）「生産初歩」という小冊子が東京で出版されました。この本にはジェーンズが洋学校で農業の重要性とこれからの方向について説いたことをまとめて書いてあります。農業、殖産興業の総論、茶説、糞説、米説から成っています。洋学校の教え子、山崎為徳、松村元児、市原武正の三人が和訳して出版されたものです。この本の自序の冒頭に「余此書ヲ著スハ肥後人民耕作ノ進歩ニ良全ノ教導ヲ示シ、傍ラ国人許多ノ疑問ニ答フルニアリ」と述べています。「私（ジェーンズ）は熊本の農業等の進歩のために指導を行い、併せて熊本人のたくさんの疑問に答えるためにこの本を書いた」と言っているのです、当時の日本にあった農業書は殆どが欧米農書の翻訳書か欧米の農学を学んだ日本人の日本農業に対する著述でした。日本に滞在する欧米人の日本農業に対する科学的著述としては日本で初めてのものと言われる貴重な本なのです。

一八七三年秋にジェーンズは熊本のみかん栽培についても自分の考えを実行しました。島原湾の浜辺に生えている野生のみかんの樹から「ゆがんた小さな渋いみかん」を持ってきました。そのころ日本ではみかんの病気が流行っていたのです。ジェーンズは来日以来「日本人は昔からの方法を繰り返すことはうまいが新しく工夫することを知らない」と感じていました。「流行病によく効きそうなこのみかんを植えて増やし改良しよう」と接木や摘果等を教えて品種改良という観点に目をつけさせたのでした。長い封建制の下で、自分たちの意志を表そうとせずひたすら昔からの方法、手段、考え方を守ることに慣れていた日本人の厚い壁に、何度も打ちのめされることがあっても、黙ってそれを見過ごすことができないのがジェーンズでありました。熊本のみかんもジェーンズの指導の結果と言われています。

ジェーンズ物語

連載 18　印刷機の輸入

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

一八七三年（明治六年）の日本では開港地以外には印刷設備はなかったといわれています。

熊本で教鞭をとっているジェーンズの下にはアメリカからの郵便物が月一回長崎経由で届けられていました。かつて嵐の中でジェーンズ一家を長崎から熊本の百貫石港まで運んできた「ノモ丸」が運んでいたのです。母国から離れたジェーンズにとってその郵便物は何物にも代えがたい喜びでした。当時、時代は刻々と変わりつつありましたが、郵便物が知らせてくれるニュースを見て、ジェーンズは時代の推移を見つめていたのです。ヨーロッパの晋仏戦争の結果とその後の動向。急速な成長と繁栄を誇っていた大英帝国。アメリカ国内の南北戦争後の「再建」とその「苦渋」。このような情報をこれらの郵便物から取り入れていたのでした。ジェーンズはこうやって取り入れた情報を授業中に、生徒たちにたびたび話しました。生徒たちはジェーンズの話を目を輝かせて聞き日本が世界の中でどういう方向に進んでいけばよいかを考えていきました。またジェーンズは従妹など、親戚との手紙のやり取りで心の安らぎを得ていました。この状況を見た熊本の人は地球の裏側の一異国まで確実に物を届かせる郵便制度のすばらしさと、新聞の存在に驚き、新聞の本文に添えられる挿絵の美しさや、出版の自由という概念に大いに関心を持ったことでした。

そこでジェーンズは印刷機を熊本で使いたいという思いにかられ中央政府と県庁に輸入する申請を出しました。簡単には許可は降りず、役所の査察や警告が最大の障害でしたがやっとのことで認可を受けることになりました。

「ジェーンズの回想」から引用します。

“「その印刷機は､インクの補給と印刷が自動化されている以外は、あの懐かしいフランクリンの原理がそのまま具現化された、魅力的な機種だった。はるばるニューヨークから送られてきたのだが、何らの故障や傷もなく、すぐ熊本城のちかくの、とある便利のよい建物の中に据え付けられた。堂々とバランスを保ちながら歯車が回り、白い用紙が躍り出した。このありさまがどんな驚きを引き起こしたかは容易に想像できることであろう。何日も何日も大勢の見物人が引きも切らず、印刷機械の運転の模様に目をこらしては、その威力をとくと胸にたたみこんでいるふうであった。」”

最初は洋学校の生徒たちの教科書を作成する目的で使用されましたが、後では不要になりました。アメリカから物資がどんどん入って来るようになったのです。明治七年、肥後の旧藩士であった伊喜見文吾、水島貫之が塩屋町に熊本活販社を創設しました。二人は長崎で印刷技術を習得しました。活版社では初めハント式手引き印刷機で新聞等を印刷していましたが後にはジェーンズが用いた印刷機の払い下げを受けてそれで印刷するようになりました。そして九州で二番目といわれる「白川新聞」（右上写真）を発行しました。九州最初の新聞、長崎の「鎮西日報」はその六ケ月前に発行されていたのでした。この白川新聞には洋学校の生徒の成績や進級も載せられました。今では生徒の成績表を新聞に載せるということは考えられないことですが、当時の熊本洋学校はそれほど注目されていたということの証明になります。明治九年には「熊本新聞」と改称されました。その後「東肥新報」「紫溟新報」と新聞が増えて「熊本新聞」は明治二十九年に廃刊しました。しかしジェーンズの輸入した印刷機「フランクリン・プレス」は大正年間にも熊本市内の印刷所で活躍していた記録があるそうです。

ジェーンズ物語

連載 19　あわやのできごと

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

一八七五（明治８）年の夏、洋学校が開設されて四年目のことです。妻のハリエットのお腹には新しい命が宿っていました。またジェーンズ自身もこの年の夏の暑さが厳しく疲れを感じていたので避暑地を探して休養することにしました。選ばれたのは熊本市の郊外の山地で五百羅漢がある岩戸のお寺でした。現在ある雲巌禅寺といわれています。お寺の住職が、当座だけ空けていた住居をわずかな金で貸していいと言ってくれたのです。

ジェーンズ一家の世話係の野々口為志（横井小楠の門下生）が新しい畳をいれ、庭を整理し、築石を直し、竹筒を新しくして、家の前の小さな池に、山の泉から湧く清水が流れるようにしました。出発です。いつものようにジェーンズは馬に乗り、野々口為志、家族、子守用等のかごが続き、警護の侍、荷物を運ぶ人の列ができました。松、杉、こけ、しだの香りが快くかんじられます。たどり着いた小屋は素敵な場所にありました。すぐ向こうに五百羅漢が並び更にその向こうに大きな薄暗い洞窟がありました。休養を始めて数日後、ジェーンズの子どもが病気になったので熊本においてきた薬が必要になりジェーンズは馬で取りに帰りました。

以下、「アメリカのサムライ」から文章を引用します。

“「付き添いは断った。そのほうが道中を急げるから。長靴を履き拍車をつけ、丈夫な小馬にまたがってギヤロップでとばしていった。山道をおりかかったところで、侍が二人、向こうから崖を登ってくるのが見えた。二本差の身分で、脇差を帯にはさんでいた。憎むべき外国人の前では反感を隠そうともしない。たづなをゆるめ、どう身を守ろうかと思案しかけると、向こうも立ち止まり、顔を見合わせて相談した。二人の前にさしかかると狭い道の内側の男が刀の柄に手をかけ、もう一人がその男を抑えるように、その男の右腕に手を置いた。この機会だ。左の長靴をあぶみからはずし、力いっぱい蹴り上げた。男の顔にまともにたたきつけてやろうと思ったのだ。しかし動いたとき、その靴の拍車が馬の横腹のいつもと違うところに激しく当たってしまった。馬はわざとそうさせたように跳ね上がり、二人の武士を道から跳ね飛ばしてしまった。馬は私が当座の間危機を脱したことが確かになるまで止まろうとしなかった。私は向こうみずにも怒り狂って、振り向くなり、こちらを見つめて突っ立ている男たちにわめきたてた。拍車が鳴ったとき、私を斬ろうとしていた男はあわてて私の足に目を移していた。あの男は長靴の中か外に、私か武器を持っていると思ったに違いないと、今も信じている。”（写真は昭和初期の雲巌禅寺）。さらに引用を続けます。

”必要な薬を手に入れたジェーンズは、帰りがけに田んぼを横切って、さっきの山道にさしかかった。先ほど出会った男たちは、とっくにいないものと思っていたのである。「さっきの場所のすぐ近くで、道いっぱいに、身なりはよいが、やはり小刀をたばさんだ、まさに同じ手合の武士があふれていたのには仰天した。一人なのにどうしよう。武器といって身につけているのは懐中ナイフしかない。考えるひまなどないとき、なるようになれと思うしかなかった。大胆にするのが一番安全だ。わたしはまっすぐ乗り入れ、人ごみを左右に押しわけて通り過ぎた。”

この事実を聞いた野々口為志は全く仰天してしまったそうです。ジェーンズにもしものことがあったら国際問題にでもなって大変なことになっただろうということが考えられたのです。幕末にイギリス人殺傷事件の生麦事件が思い出されたことでしょう。

ジェーンズ物語

連載 20　明治天皇巡幸

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

明治天皇は熊本巡幸を二度されています。明治五年と三十五年です。

その一回目の巡幸のときのことです。天皇御一行は明治五年六月十七日の夜に熊本に着かれました。ジェーンズが熊本にやって来た時と同じように小島に上陸されました。この時に天皇が乗られた軍艦、龍驤艦（りゅうじょうかん）は旧熊本藩が英国から購入した軍艦ですが、その年五月、熊本藩から朝廷に献納したものです。熊本市歴史研究会が著された「明治天皇肥後巡幸」という古い本がジェーンズ邸にありますが、それを読むと熊本人が今か今かと天皇のご来熊を待ち望んで迎えた様子と心からの歓迎振りがよくわかります。

天皇の宿泊所を「行在所　あんざいしょ」といいます。この行在所をどこにするか、県庁は慎重に考えました。その結果、ジェーンズ邸は新築で場所もよいとの理由でここを行在所にと考えたのです。その依頼に対してジェーンズは非常に歓び、二つとない光栄であると快諾しました。でも、ジェーンズはしばらく考えた結果、野々口為志に次のようにいったそうです。「もし陛下御旅館の為ならんには、余が官宅を供し奉るが如き、大に外客たる余の光栄とする所なるも、外人の官宅を以て陛下の御旅館に供せられたりといはれん事、日本帝國の為めに恐れ多く且つ陛下の御稜威を如何せん」と答えました。つまり光栄ではあるが、一外国人の住居を天皇の宿泊所にしたら日本国にとって恐れ多く、陛下の威厳を損ないはしないかと考えたのです。

県庁の役人は慎み深いジェーンズと解釈し、考えなおしたためにジェーンズ邸は行在所にはなりませんでした。その結果、行在所には旧藩時代からあった「御客屋」（旧一新尋常小学校跡、現在一新幼稚園）と米村某三郎氏の別荘（旧小島郵便局）があてられました。（写真左）

行在所を辞退したジェーンズですが、天覧授業は行いました。天皇は洋学校を訪れジェーンズに親しく挨拶し、平素の授業を見られました。ウェブスターのスペリングの勉強の後、生徒二人（中原淳蔵・市原武正）の英語の暗誦を聞かれたのです。授業が終わると庭に出て、ジェーンズがアメリカから取り寄せた種子から育てた花を献上すると天皇は親しく受けとられ、ジェーンズに勅語を与えられたと記録に残っています。洋学校の生徒たちは、今日こそはジェーンズが正式なアメリカ陸軍大尉の軍服で正装して現れると思っていたのですが、いつもどおりの平常服で現れたのを見て驚き、いっそう尊敬の念を増していったのでした。

「熊本市立一新小学校の校歌」の一番に天皇巡幸のことがうたってあります。

明治の帝（みかど）　巡幸（じゅんこう）の
鳳輦（ほうれん）　とどめ給（たま）いてし
仮（かり）の宮居（みやい）の　跡しめて
我が学舎（まなびや）は　そそり立つ

私はこの一新小学校に勤めたことがあります。その当時、こんな歌詞の校歌は滅多にないと思ったのですが、ジェーンズを知ることで非常に身近なものとなりました。

この天皇の熊本巡幸に明治政府の参議、あの西郷隆盛がお供の者の最高責任者として来たのです。巡幸のときは特に厳しい炎天下だったので、西郷は大きな体に汗をいっぱいかいて、休憩時に出された山のようなスイカに塩をつけてムシャムシャと食べたと言われています。

ジェーンズ物語

連載 21　ジェーンズから見た日本人

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

ジェーンズが熊本滞在中に感じた日本の印象を紹介します。以下の内容はジェーンズがアメリカに帰ってからの著書『熊本回想』に書いてあることです。

「火山・地震・台風・雷。こんな自然現象や災害が日本人の国民性形成には大きな影響を与えた。

一八七四年（明治七年）当時、阿蘇山の噴煙は常に見え、夜は火柱さえ見えた。阿蘇の爆発で熊本市も三日間暗黒の日が続き、灰と灰にまみれた軽石の雨が通りを埋め、またその軽石はゴーゴーとうなり続ける噴火口から二十マイル以上も離れた市内の草ぶき屋根を突き通した。（写真は阿蘇爆発）

またこの地方を常時襲う雷も凄まじいものであった。耳を引き裂くような雷鳴がとどろき鳴り渡る中で親たちは思わず子どもをかばいながらも心配し恐れた。そのような時この国の住民がしたことは、ただ布団の中に逃げ込み、その下に隠れ耳をふさぐばかりだった。彼等は体を縮めて、雷神の怒りが鎮まるように、クワバラクワバラと唱えていた。

地下における雷神の怒りとでもいうべき地震も何十回となく経験した。台風も経験したが、私は堅牢な教師館（ジェーンズ邸）という避難所のお陰で心配はしなくてすんだ。

しかし熊本の人々は家の中に身を潜めていて、台風の好餌というべきワラぶき屋根が押しつぶされて、その下敷きになった人も多く、あるときの台風ではこの熊本の町だけで一時に三百五十人以上の死者が出たとも言われている。

その中で人々は、その原因を『超自然的な神の怒り』と考え、それを鎮めるために無意味な祈りと儀式に頼るほかなかったということは不幸なことであった。これらの自然現象が日本人の精神形成に及ぼす影響は人間的な努力や忍耐といった高度な感覚を全く排除してしまう。平たく言えは人間を萎縮させる結果にしかなっていなかったと思う。」

と述べています。長い封建制のもたらした結果、日本人はわけがわからないことに対してはひたすら祈るか、恐れるしかなく、科学的な考えや対応ができないとジェーンズは考えたのです。

熊本では迷信が多いこともジェーンズは書いています。

ある寺の和尚さんからお寺の家宝を見せてもらうことになりました。和尚さんは正式の法衣を身につけ、荘重な儀式を行った後重々しい説明をしました。その通訳をしたのはいつもジェーンズの世話をしていた野々口為志です。絹や錦（にしき）で幾重にも包まれた箱を開けていくと最後に５ｃｍにも満たない金箔の小箱が出てきました。その中から出てきたのは人間の爪ほどもある大きな魚の鱗だったのです。

和尚さんの説明では、「ある時数々の難儀で苦しんでいる隣の島の人々を救おうと仏陀が海岸に来た時、その荒れ狂う海の底から怪物が現れて彼を島に渡してくれた。これはその怪物の鱗である。」ということでした。ジェーンズはまさに開いた口がふさがらなかった思いがしたといっています。ジェーンズは後の明治 30 年に再来日して鹿児島で教育にあたった時期がありました。鹿児島の魚市場で捨てられていた同じような沢山の鱗を見て、そのときのことを思いだしたそうです。

熊本に残っている迷信の根の深さを聞いたり、見たりしていったジェーンズは学校で生徒たちに教育を行なうだけでなく日本人の日常生活の合理化、民主化、近代化へと取り組んでいったのです。

ジェーンズ物語

連載 22　水前寺に遊ぶ

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

熊本の観光名所に、水前寺成趣園があります。この公園はジェーンズ一家に心の安らぎと、自由を与えたのでした。熊本県大百科事典によると、この庭園は 1636（寛永 13）年、肥後の国初代城主、細川忠利時代に「国府の御茶屋」として設けられたのが始まりで、当時は茶庭と草庵風の茶室だけであったといわれ、忠利は豊前の羅漢寺住職玄宅和尚のために、

ここに寺を建立して水前寺と名付け、お茶屋も寺に所属させたので、間もなく「水前寺御茶屋」と呼ばれるようになりました。それが三代城主、細川綱利時代になって大規模な庭園の造作が行われ、現在とほぼ同じ規模の庭園が完成し、陶淵明の詩からとって「成趣園」と命名されたそうです。

「ジェーンズの回想」から引用します。

細川侯の家族の楽しみの場所であった水前寺。ここに私たち一家も、侯の寛大な計らいのお陰で自由に出入りすることができた。ここで過ごすひと時は私たちにとっては肥後に滞在した日々の中で一番楽しいときだった。水前寺（成趣園）はいかにも日本人好みの芸術と美しさに満ち溢れた典型的な日本式庭園だった。この中では自由とプライバシーが守られ、園内にいる限り、私たちはこれらの貴重な権利を享受することができたからである。園内はせんさく好きな人々の好奇心や、しつこい質問攻めから私たちが逃れることのできるただひとつの場所だった。

細川侯の許しがなければ、いかなる人物も園内に入ることはできず、洋学救の生徒たちでさえ、私たちについて入ることは許可されなかった。不平分子が近辺をうろうろしたり、侵入を企てたりしてもおそらく、たちまち発覚したにちがいない。

水前寺は、街中の騒音や不快なにおいも感じないほど離れた郊外にあった。はるか遠くに水源を持つ清楚な清水だけが静寂の中のただ一つの動的要素だった。

東の方の山からのさわやかな微風を心ゆくまで楽しむことができた。しばしば軽い昼食や、ゆっくりと時間をかけて夕食を楽しんだりした。食事は、わが家の腕利きの料理人が調理して、一方の桶に料理、片方には食器を入れて、自らかついで水前寺に運んできた。私たちに許されたこのような楽しみは、健康のためにも必要なことで、ここでのんびりと休を休め、思索ができる静かな時間を持てたことによって、多忙な日常生活にも多少の潤いが生まれた。トット＝（長女）は弟や時には私も引っ張り出して丶池の中を危なっかしく跳んでは、ハラハラさせた。乳母は申し分のないすばらしい人だった。彼女は日陰を見つけては、敷物と枕を置いて子供と居眠りをした。

私はこの風景を見ながら、この国の状態とその改善策についていろいろと思索を巡らせた。そしてある時、次のような結論に達した。

『教育、啓蒙、知的進歩というものは、一方では支配階救に彼らの義務を教え、他方では大衆に彼らの根利を知らせ、勇気をおこさせ、権利を守るための方法を与えるものでなければならない。これこそ、この国を救うただ一つの方法である』と。

この考えがジェーンズの教育の根本となっています。明治という新しい時代がきたけれど、まだまだ江戸時代の延長であるとみたのです。貧富の差が激しく、ひたすらに過去からの習慣、しきたりを守り、権利の主張をする考えのない熊本の様子を見て、封建制の弊害を打ち破ることが自分の使命と考えたのでした。

ジェーンズ物語

連載２３　洋学校の存続延長

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

ジェーンズと契約を結んだ日本政府は契約期間は三年間と考えていました。洋学校を開設してジェーンズを日本に招くのに力を尽したのは時の知藩事「細川護久」、横井小楠の甥「横井大平」、洋学校の幹事「野々口為志」、長崎にいた宣教師「フルベッキ」でした。

大平たちが外国人教師招聘に尽力していた時は明治三年から四年にかけてです。その時には肥後の藩校としての洋学校設立が考えられていたのです。大平は留学中に見たアメリカ人の中では軍人が最も素晴らしいと考えていたので、退役軍人を招聘することを考えたのでした。また明治維新期に日本をリードする若者の育成を考えていた肥後藩も『士官学校』のような学校を作ることを考えていたのでした。

しかし、明治四年ようやくジェーンズが日本にやってきた直前の七月に国の改革として廃藩置県がなされたので、士官学校のような学校をそれぞれの県でつくることは不可能になったのです。士官学校は日本に一つしかつくることは出来ないとなったのでした。その結果一般的な普通の学校をつくる事になり、「熊本洋学校」ができたのですが、この学校は国がつくる学校（官立）となって明治政府がそのための費用を受け持ったのです。そのときの契約ではジェーンズの採用期間は三年間でした。

ところが、ジェーンズは周りが眼を見張るほどの生徒たちの成長に尽力し、学校の授業以外でも熊本の近代化に力をつくしてきたので熊本県側から、もっとジェーンズに熊本にいて欲しい、そして洋学校を存続させたいという要望が出てきました。ジェーンズ自身も最低四年間は教えたいという気を持っていたので存続を願う考えが主流となってきました。そこでこれを聞いた旧藩主「細川護久」は自費で存続させることにしました。

ジェーンズの給料は四百円でした。当時の藩知事の給料が二百五十円でしたから、いかにジェーンズに対する期待が大きかったかが分かります。細川護久の援助で洋学校は二年間の延長が決まりました。これからは熊本の私立学校となったのです。

ジェーンズは存続が決まった明治七年の学年末祝宴の式で参加した人々を前にして喜びの演説をしました。この中では教育の重要性を無知と比較して長々と情熱的に説いています。この演説は「洋学校教師祝文訳」と名付けられて本となりました。(写真左)

教育は「人類、国民、人間に幸福を与える。国家の生命であり、根本原則である。激情を和らげ偏見を弱める。農場を耕し、仕事場を増やし、工場を建て、商業の輪を広げる、云々」

無知は「災難を与え、社会に崩壊をもたらし、病であり、最大の重荷で、最悪の税である。国家を弱くする。監獄を建てて、監獄を満たす。云々」

紙面の都合で書けませんが、延々と校育の素晴らしさと無知の怖さを説いたのです。そしてこの演説を校え子の伊勢（横井）時雄に和訳するようにといいました。まだ学生であった時雄は立派な訳文を本に著しました。それが「洋学校教師祝文譯」です。

尚、洋学校より少し早く建てられた熊本医学校に招聘された医師「マンスフェルト」の給料は五百円で、その校え子からはあの北里柴三郎や緒方正規、浜田玄達などの医学者が出ています。

ジェーンズ物語

連載 24　人は何をしに生まれたのか

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

洋学校で学ぶ生徒の多くは武士の子か豪農の子でしたので、武士の子として、儒教中心の学問を修めていたものが殆どでした。原則として十歳から十五歳までの男子が入学を許可された洋学校の教育課程は四年でしたので、十歳から十九才前後までの生徒が一緒に勉強していたのでした。前に述べたように優秀な上級生は下級生の指導者としてジェーンズの助手のような役割を持っていました。この人たちの多くの者が、時代が明治と変わった今、自分たちは何に奉仕するのが人間としての務めなのだろうという疑問をもっていました。それは主とするもののためには命をかけて仕えるという考えが彼らにも浸透していたからです。国や主君のために命を亡くしても、それが武士の本望だという考えがありました。

ジェーンズの教え子の中に海老名弾正（えびな　だんじょう、幼名喜三郎写真左）という人がいます。京都の同志社大学の総長となり、組合教会の三元老と呼ばれた人で、熊本洋学校の流れを受け継いだ熊本英学教、熊本女学校（旧フェイス女学院）の初代校長となった人です。

福岡の柳川藩の武士の家に生まれた喜三郎は小さいときから、武士特有の厳格な教育を受けており、義務と責任が侍の特権につきものだと教えられていました。海老名はある冬の寒い日に物売りの子が外で物売りをしていた時に、母から「お前は寒いときにはこうやって火鉢に当たっていればよいがいざ戦になれば、お殿様のために命を校げ出さなくてはなりません」と言われて、自分は死ぬために生きているのかと愕然としたことだと述べています。学才があった海老名は柳川藩の若殿様の学友に選ばれたのです。それは非常な名誉だけでなく立身出世の道でもあったのです。しかし、海老名が輝かしい未来を感じたときに悲劇が起こりました。維新に続く混乱の中で、柳川城は明治五年に炎上し、若殿もこうした混乱の中で死んでしまったのです。海老名にとって城と若殿様を失ったのは大きな衝撃でした。海老名は「柳川藩が灰燼になったので、余は柳川藩に対して、死んだも同然であった。この事に就いて、余には、城が焼けた事よりも大きな苦痛があった」と言っています。身分喪失態はそれほどでもなかったのですが目的とするものが見えなくなったのです。洋学教のある者たちの中には依然として、儒教に満足している者もいましたが、海老名たちには儒教などの講義では疎外感が満足されなくなってきていました。

しかし彼らには、学校の厳しい規律やジェーンズが教えてくれる洋学（科学や自然、幾何学や歴史学等）があったのです。彼らはジェーンズに会うまでは数学を誤解していました。「銭勘定するために算術がある。それは人間としては卑しいものだ。本当の学問は立派な生き方、死に方をすることに、生きる道を学ぶことだ」と考えていたのです。ジェーンズは彼らに生きる道を示し、新たな生き方に取り組む可能性を与えたのでした。

ジェーンズは洋学校の生徒たちが前述した悩みを持っているのを感じてきていました。隣人に、或は社会に奉仕することが人としての最も望ましい生き方であるという考えを持っていたジェーンズはこの世の中、宇宙を支配しているものは何かということを少しずつ生徒に分からせようと考え始めました。それは洋学教が始まって四年目のことでした。

ジェーンズ物語

連載 25　ジェーンズからの問いかけ

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

儒教に物足りなさを感じている生徒が多くいると悟ったジェーンズは、生徒に接していく中で自分が最も伝えたかったことを言い始めました。

「ジェーンズ熊本回想」からジェーンズの言葉を引用します。

「当時の日本には驚くほど迷信がはびこっていた。それは超自然的なものの信仰という心の病でもあった。というのは、それが科学的思考を阻害し、創意工夫の意欲をそぎ、そのため治るべき病も治るどころか、かえって悪化させることにさえなったからである。」

ある日の幾何学の授業の中で「ピタゴラスの定理」を説明した後で次のような問いかけをしました。

「今証明したことだが、君たちが描いたり、想像したりするどんな直角三角形でも同じ結果が出ることはとても意味のあることと思わないか。斜辺の平方と他の二辺の平方の和が常に等しいということは、過去・現在・未来にわたって永遠に不変なものなのだがこれはなぜだろう。」

生徒たちは、ジェーンズ先生は何を言い始めたのだろう、とみんなぽかんとした表情で戸惑っていました。そこでジェーンズは更に他の学問にも応用して問いかけました。「力学における力と抵抗の関係、化学式によって表される化学反応、幾何学の原理は、地球や太陽系や、あるいは宇宙そのものに匹敵するマクロの数値に拡大しても答えは一定であり、科学の原理は、顕微鏡で見ることのできないミクロの世界に縮小しても同じことなのである。どうしてなのだろう。そこにはなにがあるのだろう？」

しかし、依然として生徒たちは何の反応も起こしませんでした。だれもジェーンズが何を言い出したのか全くわからなかったのです。「では諸君、なぜこのような原理が偶然や気まぐれでなく、常に一定不変であるのか答えよう。‥‥（略）‥‥それはこの世界や宇宙が、

法則と秩序の場であるということだ。この広い宇宙に偶然というものはない。人知も及ばぬような絶対者の当初からの目的と、無限の要求を満たすだけの力が存在しているのだ。」と自然のあらゆる機構を導き、支配する偉大な精神、について語り、「それこそ『神』にほかならない。」とジェーンズが言ったときに、中央の席に座っていた一人の学生、小崎弘道（写真）が、目を光らせ、身を前に出して「それは嘘です、先生。私たちはそんなものは信じません。」と言ったのです。小崎弘道は儒教を教える竹崎茶堂が最も将来を期待し、信頼していた人でした。ジェーンズは言い返しました。

「君は儒教の信者で、中国の聖人を尊敬しているが、その聖人と天皇や両親や友人とごっちゃ混ぜにしているのだ。それから、今の君の態度は儒教の教えにも反している。」というようなことを言ったのです。

周りの生徒たちのある者たちは、ジェーンズの言っていることについて真剣に考え理解するものが出てき始めました。しかし、長く続いた日本の禁教令の影響は強く、当時の熊本では宗教に関わったら、生令に危険が及ぶという考えが一般的でした。

ジェーンズ物語

連載 26　聖書勉強会（一）

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

日本ではキリスト教を邪教だと考えている人たちがまだたくさんいた時代です。ジェーンズは絶対に授業の中では宗教に関した話はしませんでした。

天下統一を志していた豊臣秀吉はキリスト教は天下統一を妨げる、悪い宗教として禁教令を出します。秀吉死後の徳川家康は大目に見る態度をとったものの、やはりキリスト教を認めませんでした。その中で熊本県では宇土、天草を治めた小西行長はキリスト教重視の政策をとりました。しかし、加藤清正時代からキリスト教徒への弾圧が激しくなります。その後、ますます弾圧は激しくなり天草、島原の乱に参加した天草島民の男女合わせて一万三千百余人は殆どが殺されると言う悲惨な結果になったのです。

長い間弾圧を受けたキリスト教でしたが明治六年にようやく信教は自由と言うことになりました。ジェーンズが熊本にやってきて三年目のことでした。

神の存在について自分たちなりの結論を持つようになっていた数人が、しばしばジェーンズのところへやってきていろんな質問を出し始めます。

「私たちが学んでおり、学問をしているのはみな先生のお蔭です。」「私たちは、科学を愛し文学を愛していますが、乏しい知識を山ほど積み上げても、それで何をするのか、何に使うのかの目標や行動なしでは自分本位過ぎるように思われます」「先生は私たちを教えるために熊本へこられましたが、先生をかくも熱心にさせ、決然とさせ、献身させているものは何でしょう。このような遠くまでやってこさせ、滞在させているものは何なのでしょうか。」「私たちに必要なものはキリスト教だと先生は思いますか」「先生、私たちはたくさんのキリスト教があることも知っています。どれが最高のキリスト教なのでしょうか。」

ジェーンズは彼らの真剣な、態度から彼らの質問に対してどう応えるか考えていきましたが、機が熟したと見たときに、土曜日の夜に自宅で聖書の勉強会を行うので希望者は来るようにと知らせました。

このジェーンズからの呼びかけに対して参加したものの動機はさまざまでした。「ジェーンズの言葉にしたがって、聖書を読んでみよう」というものもいました。何人かはあらかじめ竹崎茶堂のところへ相談に行き、「よいだろう」と言われましたが、それは信者になるためでなく異国の教えの欠陥を探すために出された許可でした。かなりの者は、この会を英語の学習する機会にしたいと思っていました。また聖書研究は面白くなかったが、ジェーンズ夫人が後で出すおやつが楽しみと言うものもいたし、キリスト教では天に昇っていく方法があるらしいと聞いてそれを確かめるために参加した者もいたのでした。

ジェーンズ物語

連載 27　聖書勉強会（二）

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

ジェーンズは四福音書を分冊にしたものを、生徒たちに配布して自室で読むように勧めました。興味を持った生徒たちはさまざまな動機を持って毎週土曜日にジェーンズの自宅に集ってきました。

ジェーンズの「聖書勉強会」は集った者が一節ずつ輪読するだけでした。そして終わりにジェーンズが祈祷をするのです。ジェーンズは自分から特に説明はしませんでした。質問があると、これに答えることがありましたが、「私にもそれはわからない」ということがたびたびありました。

ジェーンズの教育法がここにも現れました。ジェーンズが自ら進んで解説をすることはありませんでした。ひたすら聖書を読ませて自分たちで考えることを行なわせたのでした。

聖書勉強会に集った者は、三、四十人程になっていきました。彼等は真面目にジェーンズの言葉に耳を傾けていきました。その中から、キリスト教の真理を探究し、欧米文化の源を探ろうとする者が出てきました。聖書勉強会に出席している生徒たちの中に信仰の芽が生まれ始めていたのですが、各人、そのことを友人同士と語ることがまだできませんでした。

ある朝のことです。洗面所で何人かが顔を洗っていました。いつもと違って沈黙がちで、一人物思いに沈んでいた者がいました。この人の名前を「山崎為徳」と言います。熊本洋学校でも常に首席を占めていた人です。この人は、はるばると遠い水澤県（現在の岩手県の一部）からやってきた人です・当時の水深の県令（県知事）が横井小楠の門下生、安場保和（やすばやすかず）でした。安場は水澤で三人の将来性豊かな秀才少年を選んで、水澤から勉強のために各地に送り出していたのです。その中でも最も成績のよかったのが山崎為徳だったと言われています。他の二人とは初代満鉄総裁の「後藤新平」と海軍大将で首相だった「斎藤実」で、日本の歴史上でも著名な二人です。

この山崎為徳が、顔を洗っていたときに思わず口をすべらせてつぶやきました。「やはり、ゴッドはいるんだ。」

山崎のかたわらにいたのが小崎弘道（こざき　ひろみち）でした。この人は竹崎茶堂から最も重んじられていた人で、儒教に熱中している人でした。ジェーンズに向かって「神など信じません」と言った人です。そしてジェーンズに儒教の素晴らしさを伝えようとした人でした。このつぶやきを聞き逃しませんでした。

「何、山崎。」

と、大きな声を出しました。小崎にとっては許すことができない考えでした。

山崎も口にしようと思って、言ったのではなかったので、慌ててそそくさと部屋へ帰ってしまいました。心の中では後悔したのかもしれません。しかし、この言葉が他の者たちに与えた影響は大変大きかったのです。海老名弾正や宮川経輝（みやがわ　つねてる　阿蘇出身）、横井時雄（よこい　ときお　横井小楠の長男）たちもこの考えを持っていたのですが、今まで自分の心のうちに秘めていたのです。キリスト教を信じるということは当時の日本ではタブーに近いことでした。「あの山崎が私と同じ考えを持っている。実は私にもそういう思いが出てきていたのだ」。

山崎の一言が他の者に確信と、大きな希望を与えたのでした。

ジェーンズ物語

連載 24　花岡山での誓い

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

熊本洋学校ができて五年目、明治九年の一月三十日に熊本の人を震撼させる一大事件が起きました。

その日熊本洋学校の生徒四十名ほどが熊本駅の裏側にある花岡山に三々五々人目を避けるように登って行きます。花岡山は高さ一三三メートルの丘で、かつては祇園山とも呼ばれていました。彼等は多人数で同時に登ったら人目に付くので別れ別れに登ったのです。加藤清正が熊本城築城のときに鐘を掛けて時を知らせたと言う「鐘掛の松」の下の平たい土地が彼らの目指すところでした。そこで彼等は円座をつくり、まず賛美歌を歌った後、聖書を読みました。その後彼等が用意していた奉教趣意書（ほうきょうしゅいしょ）を読み上げたのです。

奉教趣意書の内容の概要は次の通りです。

「わたくしたちはキリスト教を学んでみたら大変教えられることがあった。それ以後、聖書を読めば読むほど喜びが得られる。そこでこの教えを日本に広めたいと思うようになった。しかし、この教えを知らず、古い伝統と習慣にしばられている人が今の日本には多い。私たちは命を掛けてキリスト教が公正明大な宗教であることを明確にしなければならない。一致協力してキリスト教の信仰を守ってゆくために次の約束をする。

一、キリスト教を信じるものは、お互いに兄弟としての交わりを持ち、生活全般にわたって戒めあい、忠告しあいながらよい行いを実行する。

一、信仰をもちながら、信仰にふさわしい生活ができない者は、神を欺くことになるので、神の罰をうけることになる。

一、こんにち、わが国の多くはキリスト教を拒否している。それ故に、我等のうちから信仰にそむくものがでれば、わたしたちの決意が崩れてしまう。みんなで努力しようではないか。」

この奉教趣意書を読みおわったあと、賛同した三十五名の者がこれに署名をしました。この人たちの大多数が、後に京都の同志社英学校に進み「熊本バンド」と呼ばれるようになるのです。

彼等はこの会合の感激に満たされて、その場を去りかね、引き続き花岡山の頂上、甲岩（かぶといわ）のほとりまで登っていきました。ここには現在「熊本バンド記念碑（写真左）」が建てられて、熊本の名所の一つになっています。ここでみんなは、地上に低頭平伏して祈りました。この様子を見て海老名弾正は「ああこの祈り会は成功であった。一人残らず平伏して祈っている」と感じたそうです。一団の者は、この会合が後々に歴史に残る大事件になるなどとは夢にも思わなかったことでした。一途に自分たちの新しい決意を、学校の内外に宣言するためにこの行いに出たのでした。花岡山には健康維持のためと一般社会では話すことができないことも話すことが出来る場所として以前からよく登っていたのでした。

なんとも不思議なことはこのとき歌った賛美歌「主、我を愛す」はジェーンズの又従姉妹、アンナ・ワーナーの作詞だったのでしたが、彼らは全くそういうことを知らなかったのです。

ジェーンズ物語

連載 29　**対決**

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

花岡山で奉教趣意書に署名した者は三十五名でしたが、この動きに反対する洋学校の生徒たちもいたのです。この反対派三六、七名が水前寺に結集し熊本洋学校からキリスト教信者を追放する運動を始めました。そこでこの人たちは水前寺派（写真左）と呼ばれました。彼等は次のように主張しました。

「洋学校の設立の趣旨はキリスト教を広めることではない。三十五名もキリスト教信者が出たからには洋学校は存続が危ぶまれる。信者たちが退学すれば、この難関は切り抜けられる。退学を要求する」

花岡山組は集って相談をしました。キリスト教の教えに従えば、無抵抗主義をとりおとなしく退校したがよいと考える者もいました。海老名はジェーンズに相談しました。ジェーンズの答えは「無抵抗主義はキリストの言葉を取り違えたものである。君たちは学校の優等生である。退校する必要はない。正義のためには抵抗しなければならない。」

そこで花岡山組と水前寺派が学校の講堂に集り意見を戦わすことになりました。壇上から見て右側に反対派が席を占め花岡山組は家に呼び返されている者もいたので少数でしたが、左側に対座しました。

海老名が口火を切ります。「君等の要求を聞こう」

水前寺派から「君等がいては、学校は廃校になるかも知れないから退学してもらいたい」

海老名は「われわれは、学生として、学校の面目を汚したこと一度もない。学課もよく修め、勉強にも励んだ、ジェーンズ先生の助手としても学校のために尽したと思っている。我々に落ち度があったら指摘したまえ」「信仰については個人の自由である。真理を探求するのは全生徒の責務である。我々に退校する理由はない。君たちの要求に応じるわけにはいかない」

花岡山に集ったものたちは成績が優秀な者が多かったので、反対派たちもこれを否定することはできませんでした。彼等に返す言葉は出てきません。しかし、ようやく一人が憤然と立って

「ヤソ教は不孝者である。ヤソは不忠不義の邪道である」と言ったのです。

しかし、海老名がそれに答えて「それはまだキリスト教を知らない人の言葉である。とるに足りない。」

ここでついにこの会は散会になりました。花岡山組の勝利となったのです。この会以後水前寺派は再び要求がましいことを言うことはありませんでした。

この水前寺派のリーダー格だった吉田作弥（よしださくや）が後でキリスト教の信仰の道に入ります。吉田は、自分がまいた朝顔の花が咲いたのを見て創造主の存在を認めたと言っています。これを知った海老名たちには「これこそ信仰の勝利だ。伝道の成果だ」と感謝の念が湧きあがってきたそうです。

ジェーンズ物語

連載 30　迫害（一）

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

学校内では反対派を退けた花岡山組でしたが、現実の世界には厚い厚い壁が立ちふさがったのでした。

この花岡山の誓いに一番驚いたのは、家族や親戚でした。横井小楠の高弟、竹崎茶堂、徳富一敬、野々口為志もキリスト教には全く理解を示さなかったのです。

キリスト教徒の生徒は殆ど家に連れ戻され、家族は棄教を強く迫ります。

日頃穏健であった徳富一敬も息子の蘇峰（写真左上）が花岡山組の一員であったと分かると、蘇峰を厳しく叱責し、「どんなことがあってもキリスト教は許さない。もしやめないならお前の前で私は腹を切る」と言い、蘇峰や姉の初子が持っていた洋書等を焼いてしまったのです。

吉田作弥（写真左中）の場合も父と兄が激怒しました。「信仰を棄てよ。棄てぬなら手打ちにする」と脅かしたのです。決心が固かった作弥は武士の子でした。「父上の手で死ぬのは本望です。どうぞ、お手討ちになさってください」と首を差し伸べて少しも恐れるところがありませんでした。父もこれには閉口して、斬ることはできず「馬鹿者！」と大喝。刀の背を返して峰打ちにしました。

最も迫害がひどかったのは金森通倫（かなもり　みちとも　写真下）と横井時雄でした。

竹崎茶堂は小崎弘道と金森通倫の二人を最も重んじて自分の後継者だと信頼していました。しかしその金森がいつのまにかヤソ教の仲間入りをしているばかりでなく率先して一同をリードしていることを知り驚きました。

金森は家に呼び返され一家総がかりの説得を受けますが言うことを聞きません。そこで家族は茶堂に説得を依頼しました。茶堂は家に駆けつけ懇々と聖賢の道を説き、「邪道に迷ってはならぬ」と諭しました。

黙って聞いていた金森は、話が終わると

「先生はバイブルをお読みになったことがありますか」と尋ねました。

「バイブルとはなんだ」「キリスト教の経典であります」「馬鹿者！邪道の経典など読むものか」

すると金森は

「先生の『大学』の講義の中で、事は空想ではいかない。実物に当たって究めなければ真理は分からないと教えてくださいましたが、宗教だけは実地に当たらずに邪教、邪教と言われます。どうしてそれがわかるのですか。」

と言い返したのです。茶堂は答えることができず

「不敬漢、下がれっ！」と怒鳴って席をけって帰ってしまいました。

茶堂の訓戒も効かないので家族は金森を座敷牢に監禁し、キリスト教の書物は全部取り上げ焼き捨ててしまいました。友人たちが金森に会いに行っても絶対会わせてくれません。友人たちは夜密かに金森の家を訪ね、金森がいる部屋の雨戸に小石を投げて外には仲間がいることを知らせて激励したのでした。

ジェーンズ物語

連載 31　迫害（二）

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

横井時雄（写真左下）の苦しみは最も大きかったと言われています。時雄の父、横井小楠が殺された理由の一つに『小楠はキリシタンかぶれの売国奴である』といった誤解があったのでした。これを打ち消すために小楠一門や親戚の者たちは『小楠は決してヤソではなかった』と弁解に努め、世間でもようやく誤解のために殺されたのだろうと考えるようになった矢先のことでした。その一人息子の時雄がキリスト教信者になってしまったのです。

横井家の親戚には、平成 27 年 4 月号で述べたような進歩的な人たちが多かったのです。竹崎茶堂、徳富一敬、矢嶋源助など非常に開明的な考えを持っている人が多かったのです。その親戚が集って相談した時、このようなことになって、小楠に申し訳ないと考えました。母親のつせ子に子育ての責任を取って自害をするよう勧めたのがつせ子の姉の竹崎順子でした。竹崎順子は茶堂夫人です。母親の「つせ子」は、時雄を呼んで言いました。「お前がキリスト教をやめない限り、私は生きてこの世にいることはできません。地下の父上に身をもってお詫びするよりほかありません。」と。その顔には自害の覚悟が表れていました。時雄は困り果てて使いを出し、海老名や宮川に相談しますが、二人にもいい考えは浮かびません。「とにかく思いとどまるように説得して、時間を稼ぐように」と答えました。しかしまた何度も家族会議は開かれます。またもや母親の危機です。それを知らされた、ジェーンズは警察に会議を解散させるように依頼しました。依頼を受けた警察官が、横井家に駆けつけて家族会議を解散させて事なきを得たこともありました。

この後、何度も家族会議が開かれましたが、小楠の門下生で八代県の知事をして、後に日本鉄道会社社長にもなった、太田黒唯信（おおたぐろ　これのぶ　写真左）が参加したときに、太田黒は「信仰の儀は各人の胸中、精神上のことであるので、何とも仕方がないことである。しかし時雄さん。ヤソ坊主にだけはならないでほしい」と言ったのです。

一門の人々は時雄の信仰にほとほと手を焼き、つせ子の決意も心配していたのでの、この穏健な主張に賛成し、かくも激しかった騒動も治まったのでした。時雄は洋学校を卒業すると東京へ行き、新しく開校された東京帝国大学の前身、「開成学校」へ入学したのでした。この他にも親からつばを吐きかけられたり、座敷牢に入れられたものは多数いたのですが、彼等は手をとり合いその迫害に耐えたのでした。

中には下村孝太郎（しもむら　こうたろう　工学博士で同志社社長となる）の親のように「ジェーンズ先生が教えることに悪いことがあるはずはない。預けている以上、何を教えられても支障はない」と考える人もいたのでしたが、こういう親は稀なことでした。

ジェーンズを支持してきた竹崎茶堂や野々口為志たちは、ジェーンズに学校を去ることを勧めましたが、ジェーンズは契約完了日までは勤めるといって粘り強く関係修復に努めていきました。

ジェーンズ物語

連載 32　日赤発祥の地（一）

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

ジェーンズがいなくなった明治十年二月に日本人同士の最後で最も大きな戦い「西南戦争」が始まりました。

明治六年十月、征韓論に破れて下野した西郷隆盛を慕って、桐野利秋（きりの　としあき）篠原国幹（しのはら　くにもと）たちの鹿児島県出身の軍人、文官ら約六百名が大挙辞職して帰郷します。それ以来鹿児島県は国から独立した県としての動きをするようになります。

明治十年、大久保利通を中心にした明治政府が鹿児島に送って西郷暗殺を企てた密偵事件を皮切りに、薩摩の若者が鹿児島の草牟田にある政府の武器弾薬庫を襲ったことから一挙に対立が表面化し、薩摩軍を中心とする反政府軍、約二万四千名と政府軍約五万三千名が熊本城一帯、植木、田原坂方面で激戦を交えたのが西南戦争です。反政府軍を討つ為に、政府軍の総督として元老院議長、有栖川宮熾仁親王（ありすがわのみや　たるひとしんのう）が熊本にやってきたときに、古城にあったジェーンズ邸が有栖川宮の宿泊所となりました。

この戦争が起きた時、最も心を痛めた人が、佐賀県出身の元老院議官「佐野常民（さの　つねたみ）でした。佐野は若い時から佐賀の藩主、鍋島直正に認められて医学、科学にその力を発揮してきました。佐野は 1867（慶応 3）年にパリで、1873（明治 6）年には、オーストリアのウィーンで万国博覧会が開催された時に、日本代表として参加したのでした。その博覧会場で佐野が最も関心を持って見たのが、スイス人の「アンリー・デュナン」の考えで始まった「国際赤十字」の展示館だったのです。

佐野は若い頃、大阪の適々斎塾で緒方洪庵から医学を学んだときに、「不治の病者でも‥‥棄てて省みざるは人道に反す」と教えを受けた言葉がずっと頭の中に残っていたのです。

「戦いの最中であっても、傷ついた兵隊はもはや敵ではない。この負傷者を助けることが人の道である。」この考えで敵味方なく戦争で傷ついた兵士を救う赤十字の活動を見たときに佐野の進むべき道が見つかったのです。日本に帰ってから佐野のこの考えはますます強くなり、実行する時期を待っていたのでした。

西南戦争が始まったときに、戦争の悲惨さ、被害の大きさがすぐに予想されました。毎日毎日新聞が悲惨な状況を知らせてきます。四月六日に同じ元老院議官大給恒（おぎゅう　ゆずる）と連名で、「今こそ敵味方の区別なく負傷兵を助ける組織「博愛社」を作らねばならぬ。」と、佐野は明治政府の右大臣、岩倉具視に「博愛社設立願書」を提出しました。

岩倉はこの内容を検討しましたが、「この戦争が最も激しいこの時期に急に作られた組織は混乱の元になる。救護は官軍病院に任せなさい」と許可はしませんでした。

佐野は激戦地の熊本へ向かい、五月一日に博愛社設立請願書を携えてジェーンズ邸にやってきました。陸軍参軍であり、後に首相となった山県有朋（やまがた　ありとも）に取り次ぎを依頼し、博愛社創設の趣旨を説明しました。有栖川宮熾仁親王は五月三日、ジェーンズ邸の二階でこの願いを聞き届けたのでした。（設立許可の絵、上）

「願之趣聞届候事・・・・」設立願書の末尾に朱書きでこう記したのです。「軍の医療団と相談して救護に当たりなさい。」そういう内容の設立許可書が下されました。佐野は泣いて喜びました。遂にこの熊本のジェーンズ邸で、わが国初めての人道的組織、博愛社が誕生することになったのでした。

ジェーンズ物語

連載 32　日赤発祥の地（二）

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

有栖川宮熾仁親王から博愛社設立の許可をもらった佐野常民（写真左下）はすぐさま佐賀へ帰り、旧藩主、鍋島直大（なおひろ）から資金を調達し後輩の医師を救護員として確保をし、五月二七日から熊本へ来て救護活動を始めました。

西南戦争の激戦地で名高い「田原坂」がある植木町の隣に玉東町があります。そこに「正念寺（しょうねんじ）」「徳成寺（とくしょうじ）」というお寺がありますが、そこが病院の一つとしてあてられました。ここには「博愛社発祥の地」という碑がたっています。その碑文を読むと地元の医師も参加し、また民家でも救護活動が行われたと記されています。

しかし救護活動を始めてみると思わぬことが起こりました。まだ博愛社の精神が理解されていなかったために、反政府軍の負傷兵を救助しようとすると政府軍の兵士の抗議を受けたり、負傷兵を後方の病院へ送ろうと炎天下を担架に載せて運んでいると妨害され、やむなく引き返したりしたこともありました。また温泉で負傷者を治療していると今度は反政府軍の兵士に襲われ、一人が切り殺されるという事件もおきたのです。

こういう困難な事にあいながらも、佐野は政府の許可を得ているということを説いて回りました。そして西南戦争では約千四百名の負傷兵を助けました。しかしこれは負傷兵の五%にしか過ぎなかったのです。

戦争終了後、佐野は博愛社を永久的な組織として発展させることを決意し、大給恒（おぎゅう　ゆずる）と組織拡大に努めました。最初、三十八名で出発した博愛社でしたが 1886（明治 19）年には博愛社病院を建てるほどに発展しました。佐野には世界の赤十字活動に参加する思いがありました。1886（明治 19）年日本政府も佐野の粘り強く力強い活動の結果を見て、佐野の考えが正しかったことを認めてに゛ジュネーブ条約に調印し万国赤十字の加盟国となりました。その明くる年の 1887（明治 20）年、五月二十日に世界に通用する名称をと考えて博愛社から日本赤十字へと改称したのです。

日本赤十字社の第一回社員総会で、有栖川宮熾仁親王が初代総裁に推薦され、佐野常民は社長に大給恒は副社長に選ばれました。

一八八八年(明治二十一年)福島県の磐梯山が、噴火したときには十五人の救護員が、地元の医療機関関係者と協力して延べ百五名の患者を手当てしました。これが日赤の最初の災害救助活動でした。

一八九四年(明治二七年)に日清戦争が勃発します。清はまだ国際赤十字には加盟してはいませんでしたが、日本政府はできるだけ、ジュネーブ条約の原則を守ることを約束して、日赤に負傷兵の救護に参加することを許可しました。

清の兵士で日本軍の捕虜となった人たちは、最初は恐怖の色を隠せませんでしたが、救護員が日本の兵士と清の兵士に同じ治療を行ったために、しばらくして安堵し、感極まり涙を流したと記録が残っています。これが初めての海外での人道支援となりました。

ジェーンズ邸の二階で設立許可が下りたことから。このジェーンズ邸は日赤記念館とも呼ばれています。

ジェーンズ物語

連載 33　さいごに

前ジェーンズ邸館長　黒田孔太郎

熊本洋学校は 1,876（明治 9）年の 7 月に閉校となりました。ジェーンズ一家が熊本を去ったのは明治九年の 10 月 7 日でしたが、これが結果的にはよかったのです。

熊本には明治政府の近代化、洋風化に向けた方針に反対する「敬神党」と呼ばれる勤皇派の武士の集団がいたのです。の 3 月に「帯刀禁止令」、6 月に「断髪令」が政府から出されたので、国の将来を危ぶみ、怒りや、憂いが最高に達し、神に伺いを立て政府の手先機関である、熊本県の知事等の要人や九州に一つあった官軍、熊本鎮台を不意打ちしたのです。

10 月 24 日の夜 11 時半でした。日本独自の武器、刀と槍で武装していきなり襲ったので、最初は敬神党側が圧倒的に優勢で、鎮台側は多数の死者を出したのですが、鎮台側が隊を整えなおして銃で反撃を開始したら、たちまちにして形勢逆転、敬神党側は射殺されたり捕らえられたり、あるいは退却して遂に一夜で鎮圧されたのです。これを「神風連の乱」といいます。このときにジェーンズや洋学校の生徒たちがいたら殺されていただろうと言われています。間一髪助かったのでした。

この「神風連の乱」を皮切りに二十七日に、福岡で「秋月の乱」が起き、更に二十八日、山口で「萩の乱」が起きたのですが、いずれも鎮圧されました。

ジェーンズは明治九年十月七日に熊本を去って大阪で英語の教師をした後、アメリカへ帰りました。明治二六年には再来日して、明治三二年まで京都の第三高等中学校、鹿児島の造士館高等中学校で教鞭をとりました。

晩年はカリフォルニア州サンノゼに住んで奇しくも、誕生日と一緒の三月二七日に七十二歳で亡くなりました。北海道の札幌農学校のクラーク博士は偉大な教育をして若者を育て『ボーイズ　ビー　アンビシャス』の言葉で大変有名ですが、ジェーンズの業績はクラークに少しも引けをとらない立派なものです。当時の知藩事、細川護久から勧められた身辺の警護も断り、正しいことをしていれば相手に理解してもらえると考え、熊本市内を自分の馬に子どもを一緒に乗せて堂々と行き来したジェーンズの雄姿が想像されます。

熊本を舞台として「神風連の乱」「西南戦争」等、明治維新期の歴史上の大事件がおきたことなど考えてみると驚くことばかりです。そうすると明治以前の「細川家」「加藤家」「相良家」のことも知りたくなるし、「阿蘇氏」、「菊池氏」とはどういう人だったのだろうと知りたいことが次から次へと湧きあがって来ます。

佐賀県の「佐野常民記念館」は大変立派な大きい記念館です。こんなところを訪れて日本の先輩たちの素晴らしさをたくさんの人たちが知ったら、心豊かな日本ができるのではと思いは止め処もなく広がります。

平成 26 年の五月から連載で執筆してきましたジェーンズ物語は今回を持って終了いたします。ジェーンズの業績を書く機会を与えてもらったことと拙文でしたが読んでいただいたことは、言葉に表せないほど感謝しています。

大変残念なことにジェーンズ邸は昨年 5 月の全く予想もしていなかった熊本地震で完全に崩壊してしまいました。現在復旧を目指して関係者は努力しております。またあのきれいなジェーンズ邸が復活しましたなら、是非おいでください。写真は雪の日の在りし日のジェーンズ邸です。本当に長い間読んでいただいてありがとうございました。